

特 61
383



文庫

偉

人

百

話

足

立

栗

園

44. 著 29

はしがき

一 本編の偉人百話は、極近世の偉人と認むべき人物の傳記逸話等を百餘箇條ばかり載せて置きました。其の中、我國の偉人は其の傳記を世人の熟知せる者が多いのでありますから、唯だ少年に適切なる逸話を選びて之を叙列し、歐米の偉人は其の小傳を叙しつゝ、其の逸話をも加へて置きました。思ふに我國偉人の如き犠牲的精神の上に、更に歐米人の事業に成功する氣概を加

へたならば、それこそ立派に國運發展の基たるこ
とを得て、必ず勅語及び戊申詔書の聖旨に副ふこ
とが出来てありせう。我が今後の少年は此二
つの孰れをも學ぶ所がなくてはなりません。
一東西の偉人といへば、固より本編に載する所に
止まりませぬから、更に尊王百話、名將百話等
に就て併せ看られんことを望みます。

辛亥初夏

著者 しるす



文藝叢書 偉人百話目次

其一 偉人とは何ぞや

- (一) 偉人と品性……………一
- (二) 平凡の偉人……………五
- (三) 偉人と成功……………七

其二 日本偉人逸話

- (四) 白川樂翁の人格尊重……………二〇
- (五) 全責善會……………三
- (六) 上杉鷹山の實踐躬行……………一六

目次

(七)	細川銀臺の參勤船……………	一九
(八)	頼山陽の抱負……………	二三
(九)	本居宣長の廣量……………	二四
(十)	佐久間象山の抱負……………	二六
(十一)	佐久間象山と吉田松陰……………	二八
(十二)	象山の人生五樂……………	三三
(十三)	佐久間象山の平生……………	三三
(十四)	吉田松陰の忠孝兩全……………	三五
(十五)	松陰の士規七則……………	三六
(十六)	松陰の育兒訓……………	四〇

(十七)	高杉晋作と久坂玄瑞……………	四二
(十八)	晋作玄瑞の交情及詩歌……………	四五
(十九)	松陰社中の貯蓄……………	四九
(二十)	渡邊華山の修養訓……………	五一
(二十一)	藤田東湖と西郷隆盛……………	五一
(二十二)	藤田東湖の書道……………	五九
(二十三)	東湖の讀書訓……………	六〇
(二十四)	阪本龍馬と西郷隆盛……………	六三
(二十五)	勝海舟と西郷隆盛……………	六四
(二十六)	西郷隆盛の磊落……………	六九

目次	頁
(二十七) 西郷隆盛と西洋事情	八二
(二十八) 橋本左内と西郷隆盛	八四
(二十九) 勝海舟の書生訓	八六
(三十) 西郷隆盛の膽勇	八八
(三十一) 西郷隆盛の雅量	九〇
(三十二) 西郷隆盛の修養訓	九二
(三十三) 橋本左内の振氣説	九七
(三十四) 木戸孝允の人物	九九
(三十五) 大久保利通の膽勇	一〇二
(三十六) 利通と東京遷都	一〇四

目次	頁
(三十七) 利通の偉人觀	一〇八
(三十八) 伊藤博文の洋行苦心	一〇九
(三十九) 伊藤博文と佐久間象山	一一四
(四十) 伊藤博文の信仰	一二六
(四十一) 岩崎彌太郎の硬骨	一二九
(四十二) 後藤象次郎の勇猛	一三一
(四十三) 田中平八の武功	一三五
(四十四) 古河市兵衛の勤勉	一三八
(四十五) 中村敬宇の自尊説	一三二
(四十六) 山岡鉄舟の家訓	一三四

目次

(四十七) 福澤諭吉の修身要領……………一三六

(四十八) 西村茂樹と佐久間象山……………一四五

(四十九) 西村茂樹と弘道會要領……………一四八

其三 西洋偉人小傳

(五十) ベンジャミン、フランクリンの幼時……………一五三

(五十一) 中年時代の困苦……………一五六

(五十二) 渡英と成功の緒……………一五七

(五十三) 規律ある経済的生涯……………一六一

(五十四) 座右銘……………一六三

(五十五) サムエル、ジョンソンの幼時……………一六五

(五十六) 少年時代の磊落粗暴……………一七〇

(五十七) 中年時代の苦闘……………一七〇

(五十八) 最後の勝利……………一七三

(五十九) 懺悔の逸話……………一七四

(六十) オリバー、ゴルドスマスの幼時……………一七六

(六十一) 青年時代の漂泊……………一七八

(六十二) 歐洲漫遊と苦闘……………一八〇

(六十三) 奮闘と成功……………一八二

(六十四) ゼームス、ワットの幼時……………一八五

(六十五) 少年時代の困苦と勉勵……………一八六

(六十六)	發明當時の失敗と苦心……………	一八九
(六十七)	初志始めて達す……………	一九二
(六十八)	ジョージ・ステベンソンの幼時……………	一九三
(六十九)	中年時代の勉學と研究……………	一九五
(七十)	蒸汽鐵道の大發明……………	一九六
(七十一)	周圍の迫害と我子の教育……………	一九九
(七十二)	ジョン・アストル幼時の境涯……………	二〇二
(七十三)	決志故郷を出づ……………	二〇五
(七十四)	不屈不撓の精神……………	二〇七
(七十五)	二年の刻苦と半年間の航海……………	二〇八

(七十六)	船中の莫逆の友……………	二一〇
(七十七)	忠實勤勉の効果……………	二一一
(七十八)	コルネリアス、ヴァンダービルトの少年時代……………	二二三
(七十九)	端艇業の奮闘……………	二二六
(八十)	汽船業の大成功……………	二二九
(八十一)	ジョージ・ビーボデーの幼時……………	二三三
(八十二)	少年時代の苦心と努力……………	二三四
(八十三)	商業上の奮闘……………	二三五
(八十四)	大成功と慈善……………	二三六

次 目

(八十五) 終生の公共事業……………二三八

(八十六) 逝去と感化……………二三一

(八十七) ジョシユア、メーソンの幼時……………二二三

(八十八) 少年時代の苦闘と好運……………二三四

(八十九) 成功と慈善……………二三六

(九十) アブラハム、リンコルンの幼時……………二三九

(九十一) 少年時代の正直……………二四〇

(九十二) 彼の政治的生涯……………二四六

(九十三) ジョン、ワナメーカーの少年時代……………二四九

(九十四) デパートメント、ストアの創始……………二五二

次 目

(九十五) 日米の會堂……………二五二

(九十六) ゼームス、ヒルの少年時代……………二五四

(九十七) 半生の奮闘努力……………二五六

(九十八) 大北鐵道主宰……………二五八

(九十九) 最後の勝利……………二六〇

(百) ジョン、ロツクフェラーの幼時……………二六二

(百一) 少年時代の刻苦奮闘……………二六四

(百二) 一大成功と勤儉慈善……………二六六

(百三) アンドリユー、カーネギーの幼時……………二六八

(百四) 大成功の緒……………二七三

目次

目次

(百五) 舊友に送りし書翰……………二六六

(百六) トーマス、アルヴァ、エヂソンの少年時代……………二六六

(百七) 研究と發明……………二六三

(百八) 成功と日常生活……………二六四

(百九) ビヤードポンド、モルガンの少年時代……………二六六

(百十) 獨立と活動……………二六八

目次終

文藝叢書 偉人百話

足立栗園述

其一 偉人とは何ぞや

(一) 偉人と品性

偉人とは俗に云ふエライ人といふことでありまして、エライ人といふ中には英雄もあり豪傑もあり、賢者もあり哲人もあり、又職業によつていへば、學者あり軍人あり、藝術家あり音楽家あり、農工商の實業家あり、何れも其の事業に於て成功した人ならば即ちエライ人に相違ないのであります。

偉人とは何ぞや

フ

然し等しくエライ人でありましても、其の人の爲せる所が、國家社會の進運に貢献する事が少く、又世道人心に影響する所が少かつたならば、其の事業は如何に盛大でありましても其の人の眞のエライ所は之を認めることは出来ぬのであります、即ち之を指して偉人と稱することは出来ないであります。

又たとへ國家社會の進運に多少の貢献を爲しても、又たとへ世道人心に影響する所があつたとしても、それが善方面でなく、其の人の行へる所が正路でなくて、忠誠を缺き、虚欺を働き、奸詐に長けたのであつては、之を偉人の中に列することを憚るのであります、我が國でいへば足利尊氏といひ明智光秀といふ人の如きは、俗にいふ

エライ人には相違ないのであります、どうも之を一例に偉人といふ中には加へ難いのであります、何故なればツマリ其の品性に於て缺くる所がある故であります。

總て偉人といふ資格中には、人格の認むべきものがなくてはなりません、而して其の品性が他をして敬慕せしむるといふ點がなければならぬのであります、即ち人格の認むべきものなき人は、假令權勢富貴を得て居つても、他人は心底より之に信服して居ないのでありますから、人としての價值すら存在せないとはいはねばならぬのであります、然れば此れ等の人の文明に寄與する所の少きは固より言を待たぬ所であります。

偉人とは何ぞや

四

又品性が他人をして敬慕せしむる程の人でないものは、假令一時榮華を極め幸福を得ても、毫も世道人心に善き影響を與へぬのでありますから、固より論外の人であります。

之に反し生前は假令貧困であり、或は國家社會の上に地位を得ぬ人であつても、其の人格が大に高くして仰ぐべきものあり、其の品性が百代の後にも慕ふべく敬ふべきものがあるならば、其の人の肉體は死しても其の精神は永久に生きて居るものでありまして其の生命たるや萬代不易といつてよいのであります、さらば此の點より觀て之を偉人といはねばならぬのであります、かの孔子といひ耶蘇といふ人の如き、或は釋迦といひソクラテスといふ人の如きは、どうし

(二) 平凡の偉人

ても之を偉人と稱さねばなりません、これ其の人格品性が天下萬衆の何時までも仰望敬慕する所である故であります。

然らば偉人といふ語は結局事業の上にてエライのでなくして、人物の上にてエライのであります、而して其の人物といふは人格あり品性の養はれたる人をいふのであります、されば世の所謂成功といふ如きは、偉人といふ尺度とすることは出來ないのであります。

果して然らば偉人なる者は普通人の到底企て及ぶべからざるものなりやといふに決してさうではありませぬ、人格といひ品性といふは吾人の努力によつて十分に向上し且つ養成し得らるゝものであります

偉人とは何ぞや

五

偉人とは何ぞや

六

すから、吾人にしてたとひ天才卓越ならずとも、己が志す所に勉めて怠らず、而して之と共に其の人格品性が副ふて行くなれば、其の人は何時しか偉人の列に加はることが出来るのであります。

一体吾人の天稟には非凡と平凡とがあります、非凡といふのは、生れながらにして才能優秀で人に卓越して居るのであります、之は萬人中に一人を數へるほどでありませう、平凡といふのは俗にいふ十人並の才能の具はれるをいふのであります、若し此等の人にして正當に勉めて止まず、而して人格を高め品性を養ふたならば、其の事業の成否は兎も角も、其の人の精神行爲は世人に深き印象を與へて、どこまでも敬慕の種となるのであります、近頃の例を以てい

ふならば、かの浄土宗の開祖法然上人といひ或は一向宗の開祖親鸞上人といふ人の如きは、生前には確かに大なる成功はなかつた、のみならず他宗の爲に大なる迫害を受けて遠國に配流の苦みを嘗め、叡山の爲には謝罪の起請文をさへ記したのでありますけれども、其の事業は死後に及んで大に成功し、而して年を経ると共に益々其の人格品性を仰慕せられるではありませぬか、之が即ち眞の偉人といふものであります、されば平凡の人なりとて、決して失望するには及ひませぬ、世には平凡の偉人の方が反て大なる効果を世道人心の上に及ぼす者が多いのであります。

(三) 偉人と成功

偉人とは何ぞや

七

偉人とは何ぞや

八

かくいへば偉人といふは全然事業の成功を伴はぬものと速了する人もありませうが、決してさうではありませぬ、若し事業の成功にして人格品性を伴ひ、特に其の事業の効果を國家社會の進運の上に及ぼし、世道人心の上に與ふるならば、固より大なる成功であつて、其の人は無論偉人に數ふべきものであります。

近代に及び北米合衆國の如き廣大なる新開地には實業上に於て大なる成功者があります、此等の人の行ふ所を見るに、其の財産を作るにも決して他を窮迫して己れを肥すことなく、獨立自尊にして所謂己が腕の働によつて成功を告げて居るのであります、而して其の成功するや是れ全く社會の恩惠なりとて、其の財産を私することをせ

ず、多くは公共慈善の爲に費し、徒に之を貯蓄して國家公共の財を一所に停滯せしめ、或は之が爲に他の怨恨を買ふ如きこととはないのであります、かゝる精神であるならば、其の成功たるや、實に人格品性の仰望すべき美點を備ふるものでありまして、吾人の所謂偉人たるの資格に適ふて居るのであります、我國の成功者の如きは、須らく範を此處に取る所がなくてはなりません。

偉人といふ事に就て世人は未だ十分に了解せざる所ありと思ひ、一言を叙して事實に入るの初にかくは書加へたのであります。

其二 日本偉人逸話

日本偉人逸話

九

(四) 白川樂翁の人格尊重

我國近世の名君と稱せられたる奥州白川の城主松平定信は當時賢明



無比の人であつて、爲に將軍家齊の補佐となり、幕府の執政としてよく寛政の太平を成したのであります、此の人今日所謂人格を尊重して、自己を辱かしめざるのみならずよく他人を敬ひ、以て上下の

歸服を得たのであります、嘗て述べて曰く。

人といふ者は四民と分れ其の内にも夫々の定りありて、臣となりても格祿高下あり、さればとて、固より天地間の人に變ることなし、峯の花高ぶらず、谷の花へつらはす、只だ其の位に安んずるなり。

これ人格を尊重した語であります、されば自己の出身なる徳川家(田安)を出で、白川へ養子として行かや、或日鷹野の催をなすといひつゝ、突然家老服部半藏の宅を見舞ひ、半藏の狼狽するのを見て君臣は水魚の間でなければならぬとて、其の妻子をも呼び膝突合して語明し、大に衆人の心を收攬したのであります、其の時の定信の言葉に。

此間帳面を取寄せ見候へば、前廣にいつくか参るべしと申し候へば、定めて先格を守り、待受け大層なる事にて、第一無益の物入を掛け氣の毒に候、主人が家來の處へ参り候は、何ぞ互に取かさる事これあるべく候や、將軍家の御成とは違ひ申候、打和して出合、何ぞの時は一處に枕をならべ死を共にする主従の中の何事も、隔意なきを専らと存候、御先代の格を破り不埒にも存すべく候へども、夫れを不埒と存ずるは、其方に實儀これなき故に候、母にも逢ひ妻にも逢ひ申すべしとて呼出し、出逢ひ申候、俄の事にて土産も用意せず、あとより遣し申すべく候とて、翌日忩へ備前長允の脇差、二男へ彌市が打たる的弓一張、母へ綿十把、妻へ羽二

重二疋遣候、尤も輕き事にて候、あの方にて物入無之、持せ候辨當を開き、供の者も給へ、半藏家内へも給へさせ候云々とあるは、當時の實況で以て諸侯に稀なる平民的の振舞であつたことを知られるのであります。

(五) 同責善會

樂翁は又一藩の士を集めて責善會といふを催し、大に武士の品行性を格を向上せしめんと勉めたのであります、其の主意は左の通りであります。

○右の會致候ものは誓紙神文いたし可申血判におよび不申(書判)

責善會に列し候上は、切磋琢磨聊の間も忘却致し申間敷候、定日
 會合はもちろん其外にも同志會合責善いたし可申候右責善の節
 聊かも、我れ惡事を隠し申間敷候、惡事申され候とて聊か遺恨に
 存じ申間敷候事、互に深切にすゝめたすけ候て、ともく善道一
 歸の心掛肝要の事、右會中は心安く聊か隠し不申、家内の事、内
 心の心得まで申合可申、最も其儀かつて會の外に他言致し申間敷
 事、右等の條々相背くに於ては會中絶交致され候とも、會て違背
 不仕、會日、月に一度又は二度たるべし、責善會の内、何の巻修
 行いたすべし、一卷定日に持出し、よみ候て、其箇條にあて、自

己心中耻かしき事無之皆々心よき程に行ひ應じ候や、又は云々の
 事有之間、如斯に候處直し可申候、此の如き心術心掛候
 と申し、餘儀の事まで、申合ひ、箇條に付て、猶又かやうの事
 に候て、其の節は如何取計候哉と申す様に互に問を設け、申
 合ひ、筋道吟味いたし可申、かやうなる事承傳へ申候、眞にこ
 れある事にや、慎むべき事などをば、愈々あらため又戒め、又は
 賞むべき事に候は、賞し、面前に其の人の評判まで申候て責
 善いたし候事、それに付、人のうわさ家内の事など、あしざま
 に申候とも、心術修行舍中の事故苦しからず、併し又それを他
 言致し候儀はあるまじき事。

かくの如くにして切瑳琢磨したればこそ武士の面目をよく維持し得たのであります、これ今日の紳士青年の大に學ぶべき修養方法であります。

(六) 上杉鷹山の實踐躬行

松平樂翁と並び稱せられた鷹山上杉治憲は東北米澤の藩主であつたが、其の領内で、節儉の政治を始めた時、自分先づ綿衣を着け、朝夕の膳部も一汁一菜と定め、之を家中一同に達して、己れに倣はしめたのであつた。而して尙ほ臣下の用ひぬものがあるを見て、綿衣の下に着けて居た絹紬を止めて綿衣を重ねたほどであつた。所が此の儉約令が或る出來事より領内一般に行はるゝやうになつた

逸事がある、それは鷹山の近習を勤る某の親が隠居にて風月を樂み一日遠き田舎へ保養旁々出掛



けた時、日頃懇意にせる素封家に泊つた、所が夜に入り据風呂が沸いたから温まるべしと知らせて來た、そこで其の人は衣類を脱ぎ、茜染の木綿の襦袢を屏風に打掛けて湯に

入つた、それを亭主何心なく見付け、かゝる粗末な襦袢を何故に大事さうにせらるゝやらと、仔細を尋ねた、所が、其の人答ふるやう

實は其の木綿襦袢は殿様拜領の物で、當時手洗番を勤めて居る、拙者の子息より送つて来た、されば之を下に着けて珍重して居るのであるといつた。そこで名主夫妻も始めて鷹山の實踐躬行して節儉を勉めらるゝを知り、今までは儉約令を見る毎に、主君始め木綿布子に一汁一菜と仰せらるゝけれども、それは表面ばかりの事で、十五萬石の殿様が決してそれを實行なさる筈がない、多分それは家老共の計らひであらうと信用して居なかつた所、今現在に實物を拜見して驚き入つた次第でありますと、そこで大に感激して近々他へ嫁入せしめんとて支度をして置いた娘の衣類中、絹紬の如きは贅澤なりとて、一々之を木綿に代へんとて、早速賣拂ひ、絹を木綿にして嫁

入させた、此の事何時しか近郷に聞へたから、百姓共、悉く感じ入り、殿様が其の通りであり、名主様もアノ通りであれば、吾々も勿論實行せねばならぬとて、其の後は令せずして勤儉が實行せられたといひます、この身を以て下を率ゐるといふことは社會の上流者の今日に於ても大に勉めねばならぬ所である、これツマリ戊申詔書の御旨に副ふ所以であります。

(七) 細川銀臺の參勤船

樂翁、鷹山と並び稱せられた名君の一人に肥後國熊本城主銀臺細川重賢といふ方があつた、夙に民力休養を思ひて勤儉を實行したが其の江戸に參勤するには、常に公の豊後領内なる鶴崎といふ所より

船に乗り、播州室津に押渡り、それより陸路を打たせて江戸へ向ふのであつたが、御供の船のみは播州の沖を出て難波へ着く定めであつた、然るに安永四年例の如く室津へ着船した時、銀臺は指揮役の野間文左衛門を呼び、何時も難波に着くべき船は陸路に後れじと、雨風をも厭はず發船すと聞くが、若し一朝事あらば由々しき大事といはねばならぬ、さらば神妙の志は受くるけれども、今後は空の景色を見定め、晴天の日を見て發船するがよい、又船の修理を怠ては禍を招く基となるゆへに、能く／＼氣を附けよと諭された、時に銀臺公の參勤船は太守の御座船といひ其の製造に念を入れ、毫も節なしの材料を選んで造つたのであつた、さらば之を購はんには數千

金を擲たねばならぬ、其の費へ莫大である、所が一日公は近習に向ひ、予の參勤の節には、從者共の船は如何にして製造するかと問はれた、そこで近習答ふるやう、それは材木の節ある所を選び抜き痕を補ふて船を作ると答へた、其の時鷹山は近習に向ひ予の船も其の通りにせよ、從者共が容易くそれにて渡れるならば、予にも固より故なく渡れる筈である、若し之を危ぶむといふならば、從者の船をも悉く節なしの材にせねばならぬではないか、而も從者には危き目をさせ、我れ獨り堅固に構へたとて何のよき心地のするものぞ、されば從來の如く徒に無用の財を費して、國の煩ひとなる如き船は作らぬがよい、之も節儉の一つであると言はれたから、家臣共は大に

其の理に服し、且つ其の仁徳に感じて一層勤儉を實行するやうになつたのであります。

(八) 頼山陽の抱負

一代の史家頼山陽は其の抱負實に公明正大であつて、一身の毀譽を度外に置き、以て大義名分を明かにせんと盡瘁したのであります。それが爲に日本外史、日本政記等の名著を成すに至つたのであります。すが、左の文字の如きは彼の抱負の大なるを窺ふべきであります。身は一室に偃仰して心百世の失得に關す、己が鹽齋を恤ますして人の家國を憂ふ、嗟々是れ何物の迂拙男兒ぞや、然りと雖も焉んぞ此の迂拙を念ふの時なきを知らんや。

この語は嘗て自己の肖像に賛したものであります。今日南北朝正



閏論起りて、果して此の迂拙兒を慕ふの情が湧て來たのであります。又其の身の硬骨にして人に屈せぬ心事を述べて曰く。

此の膝諸侯に屈せず、聊か故君の徳に答ふ、此の眼之を群籍に謁して先人の囑を虚うせず、此の脚母の輿に侍して二たび芳山を廻り、三たび太湖に棹さし、四たび淀灣を上下す、而も未だ嘗て朱頓の門に踵かず、此に殘杯冷

矢を嘗めず、而も此の手黔黎の寒餓を援けんと欲するなり。其の富貴も淫する能はず、貧賤の移す能はず、威武も屈する能はざる。氣概は確かに孟子の所謂大丈夫と謂つべきであります。

(九) 本居宣長の廣量

我が國學の大家にして専ら古道の闡明に勉めたる本居宣長は、一代の文豪だけに、必ずしも師説に拘泥せず、一日人の問に對して左の如く答へたのであります。

おのれ古典を解くに師の説と違へること多く、師の説のわるき事あるをば、辨へいふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、是れすなはち、わが師の説にて、常に教へられし

は、後によき考への出來たらんには必ずしも師の説に違ふとてな憚りそ、となむ教へられし、こは最と尊き教にて、吾が師のよにすぐれ給へる一つなり、大かた古へを考ふることに、さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ盡すべくもあらず、又よき人の説ならんとて、多くの中には誤りもなごかなからむ、必ずわろきこともまじらでは、これあらず、其の己が心には今は古への心ごとごとく明かなり、これをおきては、あるべくもあらずと、想ひ定めたることも、思ひの外に又人のことなるよき考へも出來るわざなり、數多の手を経るまに、先前の考への上を猶よく考へ究むるからに、つきくに委しくなりもて行くわざなれば、師の

説として、必ずなづみ守るべきにもあらず、善き悪きをいはず、ひたふるに古きを守るは學問の道にはいひがひなきわざなり。

之にて如何に大襟度を有して居つたかを察せられるのであります。

(十) 佐久間象山の抱負

墓末の傑士にして時勢に明かであつた象山佐久間啓は其の抱負實に大なるものがあつたのであります、嘗て其の天の使命を受けたりてふ精神を述べて曰く。

人の及び知らざる處にして、我れ獨り之を知り、人の及び能はざる所にして我れ獨り之を能くす、是れ亦天の寵を荷ふなり、天の寵を荷ふこと此の如くにして、誰だ一身の計を爲し天下の計

を爲さずんば、則ち其の天に反くや豈に亦大ならずや。

又嘗て其の國事を憂へたる罪によつて獄に下さるゝや、自ら其の志を述べて激闘したのであります。

予自ら罪を得て獄に下る、日に孟子の此章（舜發畎畝の章）を讀み、以て自ら力む、曰く天其れ我を用ふるに意あるか、然らずんば此の物奚ぞ宜しく至るべけんや、斯の道遼遠縣邈、未だ必ずしも給する能はず、然りと雖も天意固より未だ知るべからざるなり、即ち吾の困厄に處する、豈に奮發して激闘せざるべけんや。

これ己が命を天に歸するもので、即ち人事をのみ考へて苦慮せぬのであります、されば嘗て獨立自尊の精神を發揮して曰く。

○雨 風月如悔

頑犬吠成群

是亦尋常事

利害何足云

○誘者任汝誘

嗤者任汝嗤

天公本知我

不覓他人知

青年男子は此の氣概がなくてはならぬことでもあります。

(十二) 佐久間象山と吉田松陰

長州藩第一の人物と推されたる吉田虎次郎松陰は其の性豪氣活達で眼中殆ど人なき概があつたから、江戸に来るや、當時の碩儒藤森弘庵、鹽谷岩陰などを訪ねて與みし易しとし、意氣頗る高まつた、然るに或日信州松代藩士佐久間象山の盛名を聞き、之を訪ふた所、象

山の風貌實に俊偉なる所あるを視て先づ之に驚いたが、之より先き象山は松陰來ると聞くと、門生に命じて一枚の虎の皮を出させ、松陰をして之に坐らしめんとした、されど松陰辭して之



に其の人物に敬服したが、

既にして松陰象山に謂て曰く、方今幕府を奪はれ大に象山に心服した。かくて兩々膝を交へて國事を談ずるや互

は天下正義の士を忌むこと蛇蝎の如く、先生の議論をも喜ばず、將に獄に投せんと欲して事且夕に迫つて居ると見受ける、小生は之を見らるに忍びぬのでありますと、時に象山笑ひ答へて曰く、或はさうであらう、然し士は、亂世に生れては固より生を期せぬのである、さらば唯だ死を冒して國事に盡さんのみであると、其の生死を念頭に置かぬ度量に感奮し、松陰は深く結んで子弟の禮を執りました、されば此の後松陰は象山に勵まされて海外の事情を知らんと欲し、爲に外船に投ずることとなつたのであります、其の時象山は詩を作つて松陰に贈つたのであります。

之子有雪骨、

久厭嬖豎群、

衣振萬里道、
 雖則半語人、
 送行出郭門、
 環海何茫茫、
 周流究形勢、
 智者貴投機、
 不立非常功、

これやがて開國進取の國是を産み出した先見の詩であります。

(十二) 象山の人生五樂

君子に五樂あり、而も富貴與らず、

心事未語人、
 村度或有因、
 孤鶴橫三秋晏、
 五洲自爲隣、
 一見超三百間、
 歸來須及辰、
 身後誰能賓、

一門禮儀を知り、骨肉罅隙なし、一樂なり、
取予苟もせず、廉潔自ら養ふ、内は妻孥に愧ぢず、外は衆民に作
ぢざるは、二樂なり、

聖學を講明し、心大道を識り、時に隨ひ義に安んじ、險に處する
こと夷なるが如し、三樂なり、

西人理屈を啓くの後、に生れ、而も古聖賢未だ嘗て識らざる所の理
を知る、四樂なり、

東洋の道德、西洋の藝術、精粗遺さず、表裏兼該し、因て以て民
物を澤うし、國恩に報ずる、五樂なり、

これ佐久間象山の述懐であつて、かくて彼は天命に安んじて人事を

盡したのであります。

(十三) 佐久間象山の平生

佐久間象山の平生の態度に就き、蓮舟田邊太一翁の語られた所を見
ると、如何にも象山の面目を窺ふことが出来ます、左に翁の説話を
紹介しませう。

私が初めて佐久間先生に面會した時は、未だ二十一二歳であり
ましたが、木挽町なる道場には僅に十人計りの門人が出入し、木
製の鐵砲を列ね、又大砲は車に乗せてありました、河勝縫之助、
後に富永相摸守、それから二三人旗下の士、諸藩の人も参りまし
た、時に私共は少年でありますから、餘り詳しいことは分らなかつ

つたのであるが、初対面の時に先生の風幸に驚きました、紫かゝつた緞子見たやうな緇の被布を着、威風堂々と厚い縮緬の座蒲團に坐られたるさま、芝居でする何の大將にさも似たり、兩側には清く飾れる美人さへ侍座して、シーといふ警蹕の聲のかゝらぬばかりなるに驚き入りました、又それが稽古場に出らるゝ状など、一舉手一投足もみだりならず、實に話に聞く由井正雪はこの風采ならめと想像するばかりでありました、而も先生のなさるゝこと凡てこれに適ひ、手紙などを書くにも必ず奉書の紙に重々しくお認めになり、決して巻紙などには書かれなかつたのであります、此の容態ふらるゝ所は、先生の抱負の自ら現はるゝ所であつて

凡人の強いて之を希ふものと違ひます、此の大きく高くして居らるゝ所に先生の本領も亦自ら籠つて居らるゝことと思ひます云々。

(十四) 吉田松陰の忠孝兩全

吉田松陰が忠孝兩全の人であつたことは世に名高きものであります、左の父母に送つた最後永訣の文字などは實に其の忠孝に厚き精神を窺ふことが出来るのであります。

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出来申さず、非常の爰に立至り申候、嗚々御愁傷も遊ばさるべく拜察仕候。親思ふ心にまよさる親心

けふの音づれ何とさくらん。

乍去、去年十月六日差上置候書、得と御覽遊ばされ候は、
 左程御愁傷にも及び申さずと奉存候、尙又當五月出立の節
 心事一々申上候に付き、今更何の思ひ残す事御座なく候、此の
 度漢文にて相認め候、語三諸一友書も、御轉覽遊ばさるべく候、幕
 府正議は丸に御取用ひこれなく、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈
 致し候得共、神國未だ地に墜ち申さず、上に聖天子あり、下に
 忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力落し無之様奉
 願候、随分御大切に遊ばされ、御長壽に御保ち可被成候、以
 上。

其の遺言には左の如く記してあります。



兩北堂様、随分御氣体御厭ひ專一に奉存候、私誅せられ候共
 首まで葬り呉れ候人あれば、未だ天下の人には棄ら
 れ申さずと御一笑奉三願一上
 候、吳々も人を哀まんより
 は、自ら勤むること肝要に
 御座候、私首は江戸に葬
 り、家祭には私平生用ひし候硯と去年十月六日呈上仕候書
 とを神主と共に被成候様願上候、硯は己酉の七月赤馬廻浦候

節、買取りしなり、十年餘著述を助けたる功臣なり、松陰二十回とのみ御記し奉願候。

如何にも死を視ること歸するが如き趣があります。

(十五) 松陰の士規七則

一凡そ生れて人とならば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あつて君臣父子を最大となす、故に人の人たる所以は忠孝を本とす。

一凡そ皇國に生れては、宜しく吾が宇内に貴き所以を知るべし、蓋し皇朝は萬系一統にして邦國の士夫、世々祿位を襲ひ、人君、民を養ひて以て祖業を續ぎ、臣民君に忠にして以て父の志を繼ぎ

君臣一体、忠孝一致なるは唯だ吾國を然りと爲す。

一士道は義より大なるはなし、義は勇に因りて行ひ、勇は義に因りて長ず。

一士の行は質實にして欺かざるを以て要となし、巧詐過を文るを以て耻となす、光明正大は皆是より出づ。

一人、古今に通せず、聖賢を師とせざれば、則ち鄙夫のみ、讀書尙友は君子の事なり。

一徳を成し、材を達するは師恩有益多きに居る、故に君子は交遊を慎む。

一死して而して後ち止むの四字は言簡にして義廣く、堅忍果決確乎

として扱くべからざるものは、之を捨て、術なきなり。

右士規七則、約して三端と爲す、曰く志を立て、以て萬事の源をなす、交を擇び以て仁義の行を輔く、書を読み以て聖賢の訓を稽ふ士苟くも此に得ることあらば、又以て成人となすべし。

(十六) 松陰の育兒訓

凡そ人の子の賢さも愚かなるも、善きも悪きも、大抵父母の教による事なり、就中男子は多くは母の教を受くること又其の大がいなり乍然、男子女子ともに十歳以下は母の教を受くること一入多く、或は父嚴かに、母は親し、父は常に外に出で、母は常に内にあればなり、然れば子の賢愚善惡に關する所なれば、母の教は、忽かせに

すべからず、然し其の教といふも、十歳以下小兒の事なれば、言語にてさとすべきにあらず、唯だ正しきを以て感ずるの他あるべからず、昔し聖人の作法には胎教と申す事あり、子胎内に宿れば、母は言語立居より給へものなどに至るまで、萬事心を用ひ、正しからぬ事なきやうにすれば、生れる子、形体正しく器量人に勝るとなり、物知らぬ人の心にて、胎内に舍れるも見聞もせず、物も言はぬものゆゑ、母の行ひ正しくしたりとて、などか通すべきと思ふべけれど、こは道理を知らぬ故合點行かぬなり、凡そ人は天地の正しき氣を得て形を拵へ、天地の正しき理を見て心を拵へたるものなれば、正しきは、習はず教へずして自然持ち得る道具なり、故に母の行ひ

正しければ自然感すること更に疑ふべきにあらず、是を正しきを感じずと申すなり、況して生れ出て目も見へ耳も聞へ口も物云ふに至りては、例へ小兒なればとて、何とて正しく感ぜざるべきや、扱又正しき人の持前とは申せども、人は至て敏き者ゆる、正しからぬ事に感ずるも、亦速かなり、よく心得べきことならずや、因て茲に人の母たるものゝ行ふべき大切なることを記す、此の他、小なき事は記さずして人々辨ふ所なれば略し置きぬ。

(十七)

高杉晋作と久坂玄瑞

長州の吉田松陰門下に二俊傑があつて、双壁と稱せられ、而も兩人相推譲して國事に盡す所があつたから、師松陰すら、これ實に國家

の至福なりといつたほどであつた、其の兩人とは外ならぬ高杉晋作と久坂玄瑞とであります。

晋作は慶應元年正月に兵を擧げて藩内の俗論黨を攻め、藩士をして悉く勤王の議に賛せしめ、幾くもなく幕府より征伐せらるゝこととなるや、晋作は防禦の長となりて連戦幕軍を破つたのである。然も惜むらくは晋作は強酒の爲め遂に肺を傷け、病を以て馬關に卒したが、其の歳僅かに二十九であつた。

又玄瑞は文久二年に晋作及び入江弘毅等と京師に入り、後又江戸に出でて御殿山の英人館を焼き、大に攘夷の氣焰を吐き、元治元年洋夷親征の詔下るや、玄瑞大に喜び、直に國に歸りて奇兵隊を組織

し、當時馬關に碇泊せる洋艦を撃て之を攘ふた、そこで朝廷より大に之を賞せられ、藩主亦之を賞して參政に任じた、かくて玄瑞は復び京師に上り、大に國事に盡さんとした所、京師の形勢俄に一變し朝廷は三條公以下十二氏の官職を削り、攘夷の詔を廢し、長藩の守備を罷め、薩摩會津兩藩をして之に代らしめたから、玄瑞は大に奮慨し、遂に幕府を討たんとしたが、藩老の爲に止められ、竊かに三條公以下七卿を奉じて國に歸り、更に國老福原越後、國司信濃守と共に兵船に乗じて京師に上り、三條公以下七卿を復職し、藩主父子の宥免を乞はんが爲、兵五百を率ひ天王山より進んで禁闕に逼らんとし、會津桑名の兵と戦ふて克たず、玄瑞爲に天王山に返引し

再舉を圖る旨を諭して衆を散じ、靜かに自刃して後火中に投じて死んだのである、年僅かに二十六であつた。晋作も玄瑞もかく維新前の國論一定せぬ際に身を處し、不幸にして早世したが、然し其の國事に盡した精神行動は大に稱すべきであります。

(十八) 晋作玄瑞の交情及詩歌

晋作と玄瑞は松陰門下の双壁といはれただけに其の意氣を以て互に許し、交情亦親密なるものがあつた、されば一日兩人相携へて某處に飲んだ所、互に國事を談じて慷慨淋漓、晋作先づ謳ふて曰く。

儘よ三升樽、横手に提げて

破れかぶれか、頬かぶり



其愉快の状を見て、玄瑞亦謠ふて曰く。

龍田川、無理に渡れば紅葉が散るし

波らにやきこえぬ鹿の聲。

其の音調頗る清く且つ歌曲に長じたか

ら、二人相和し相興じたのみならず、隣

室道行く人をして耳を傾けしめたといひ

ます。

兩人の交情は此の如くであつたから、玄

瑞先づ國事に斃るゝや、晋作之を弔して曰く。

埋骨皇城一宿志酬

欽君卓立全盟裏

精忠苦節足千秋

不貧青年第一流

又兩人は當時身を棄て國の爲に殉じたのであるから、かゝる國歩艱

難の秋でも世人は多く之を嗤つた、然も彼は之を意とせず、専ら奔

走盡力したものであつた、されば晋作は其の懷を詩に述べて曰く、

身被ニ狂名何足患

拔山膽力斬姦劍

只悲父母老三寒庵

今夜客窓夢三小楠

其の志の在る所を知るべきであります、又玄瑞は其の志を國風に

寄せて曰く。

武夫のおみの男はかゝる世に

なに床の上に老はてぬべき。

いく度もくりかへしつゝ我君の

御言し讀めば涙こぼるよ。

其の國に許した精神を見るべきであります。

玄瑞又文久三年八月十八日に思ふ事ありとて左の長歌をよみました
之を見て當時の状を偲ぶべきであります。

世は刈薦と亂れつゝ、紅さす日もいとくらく、蟬の小川に霧立ち
て、隔ての雲となりにけり、あらいたましや靈きはる、内裡の朝

暮殿居せし實義朝臣に季朝卿、壬生、澤、四條、東久世、其の外
錦小路どの、今浮草の定めなき、旅にしあれば駒さへも、進みか

ねては嘶きつゝ、ふりしく雨の絶間なく、涙に袖のぬれはてよ、こ
れより、海山、淺茅原、露霜あきてあしが散る、浪花の浦に焼く
鹽の、からき浮世に物かはと、行かんとすれば東山、峯の秋風身
にしみて、朝な夕なに聞き慣れし、妙法院の鐘の音も、さえて今
宵は哀れなり、いつしか暗き雲霧を、拂ひつくして百敷の、都の
月をし、めで給ふらむ。

(十九) 松陰社中の貯蓄

久坂玄瑞が松陰門下に在りし時、社中申合せて零碎の貯蓄を奨励し
たことがある、而も毎月寫本をして其の料金を積まんとしたことで
あつた、其の主旨頗る面白い。

此度全社中申合せ、自分く^{ちから}の力を盡し、骨を打りて瑣細の事な
 からも、相まうけ置きたき事に候、非常の變、不意の急に差懸り
 候ても、囊中拂底にては差間ふものにて候、追々有志の人の牢
 獄に繋がれ、又は飢渴に迫り候ものも相たすけ度、義士烈婦の
 碑を建て、墓を築く等にも力を盡し手を延し度き事に候へども、
 全社中、有餘の金もあるまじき事に候得共、何れ此方の至誠をの
 み貫きたき事に候。

されば毎月寫本なりともして、僅かの儲け致置き度、月末松下塾
 まで、銘々持寄可致候、半年にもせよ、一年にもせよ、塵もつ
 もれば山となる理にて、屹と他日の用に相立つ目途に可有之被

考候、全社中、身の膏を絞り出して集ることなれば、容易に費
 すべきにあらず、やむを得ざる事あれば全社中申し合せの上にて
 取揃可申候、抑々人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の事な
 らば、如何様にも相計ふべけれど、我々にては斯くまでにするは
 貧者の一燈とも申すべき事に候、至誠のつらぬかぬ理はよもある
 まじきなり、依之此度取建候金を一燈錢と名づくるなり。
 一毎月寫本六十枚づゝ、松下村塾まで、必ず持參致置候事。
 一寫本料は、先師の定むる所、眞字十行二十字、五文、片假名全
 断四文の事。

一日僅かに二枚づゝの事なれば、さまで勉強のならぬことはあ

るまじ。若し此の數不足ある時は、一枚の辻を以て相償ひ必ず持參可レ有レ之候事。

右の條々此度申合候處、是しきの事さへ骨を惜み候位にては、我々の至誠貫き候事も無二覺束一候様被二相考一候、銘々屹度怠らぬやう致度ことは申すも疎かに候、以上。

磊落なる志士には珍らしき申合せであります。

(二十) 渡邊華山の修養訓

參州田原藩の參政たりし華山渡邊登が國事に盡した事及び親に孝なりしことは、世に有名なるものであるが、此人平生より修養上に心を
用ひ文武を兼修し、且つ人格を高めんと勉めたのであります、其の

座右銘とも見るべき訓戒に曰く。



交友の事

交り候人は佐藤一齋、本多思齋、此の二人は心事の相談致し不レ隱候事。

臨地屋代、北青爐、瀧澤馬琴此の三人は見聞を廣め、書物等を借用致し益友なり

清水俊藏、沼田榮大夫此の二人は武道に達し心得になり候事ども申談じ候へば益友なり、折々往來致すべく榮大夫、近頃知る人

になりたれど 未だ深くは知らず、安積祐助、菊池順助文事を談すべく、谷文晁、市河米庵、檜山坦齋、立原杏所、書畫の道に深き人なれば常に益あり、交りて樂むべし。

信を忘るなかれ

常に交る人多し、家近き人は更なり、全藩の者は格別なることなれども、交りて己れに益なく、彼も益なく、彼れ來らば拒むべからず、我れより迎ふる事なかれ、義理あしきことは爲すことなかれ、信を忘るべからず、他人は格別なり。

光陰を惜むこと

行儀作法、随分簡にして常に違へず、日々返思すべき事、飲食相

節す、出入動靜相心得、前後寸陰を惜み思ふべし、遠慮第一の事言語多からず、一々詳密に相辯じ候やう心得べき事、一寸書附候物すら、書正しく、況んや文理相通じ候やうに致すべき事。右條々相守り浮躁倭辯、惰弱放肆のもの、心易く向ふより向はざる様に随分心得申すべきこと、第一、身難からぬやう致すべく多擾なれば遠慮致す間もなく、自然と徒に日を送る事出來るなり兩親御出被成候内は事を曲げても、内職は出精致し困乏を救ひ候手段、第一に心得、御兩親の御安心を鬼神に誓ひて可奉祈候事。

(三十一)

藤田東湖と西郷隆盛

維新の大豪傑西郷隆盛が未だ吉之助と稱し、眼大の綽名を鹿兒島に馳せた頃、今や國家多事、志士國に盡すには先づ天下有名の士に交



らねばならぬと覺り、當時水戸藩士藤田虎之助の名望が最も高かつたから、江戸に来て虎之助を水戸の藩邸に訪ふた所が虎之助は兼て吉之助の名を聞いて居つたから直に迎へて之を室内に延き、挨拶の後

「僕は今、君命を以て將に登城せんとした際である、どうか暫く此

處に待て居て貰ひたい」と告げ、サツさと出て行て仕舞つた、そこで吉之助は座に在て待つ間の所在なきに、傍を見ると一口の刀が掛けてある、其の飾りが頗る立派であるから、之が東湖先生の珍蔵であるかと、イキナリ櫛を拂つて之を抜いた、所が光彩眼を射り實に立派なものであるから、コリヤよく斬れるだらう、一番試して見やうと、早速側の柱に向て打込むこと數回、爲に柱は剝がれて木屑が四邊に飛んだ、吉之助はそれにも頓着なく、やがて肱を曲げて横になつた、所へ虎之助は御用を濟し、急いで歸つて來て見ると座敷中木屑だらけで、而も吉之助は其の中に在て、グツ／＼と肝をかいて睡て居る、起すのを氣の毒と思つて己が座に就き、少時待て居

ると、やがて吉之助は失禮々々といひながら睡りより覺め、起き返つて直に政治を談じ時勢を語り、聖賢の道を語り、話し中互に木屑を捫りながら笑ひ興じ、既にして吉之助は辭して去つたのである、その時虎之助は其の柱を傷けられたことを一言も尤めず、吉之助も一言の詫もせぬ、此の物に動せぬ態度を見て東湖の虎之助は、さすが吉之助は天下の大人物であると知り、之を其の主景山公に薦め、島津公より吉之助を貰ひ受けんことを請はしめた、然し島津公は吉之助の少時より非凡の才識あるを愛せられ、之を拔擢せんと欲せられた程であるから、勿論辭退して御請はしなかつた、此の時頃より西郷吉之助なる名は識者の間に高まるに至つたのであります。

(三十二)

藤田東湖の書道

藤田東湖は書道にも達し、其の筆力の勁適なることは、他に多く類を見ざる程であるが、これ其の慷慨の氣節が外に現はれたものといつてよいのである、さればにや嘗て書を學ぶには常に趙子昂の墨帖を座右に供へて之を愛して居つたが、然も一度も之を机上に置くことなく、毎に之を机の下に卻けた、或人怪んで其の故を問ふた所東湖襟を正し、答へて曰く。

自分は子昂の書を愛して之を學ぶことは久しい、然し彼れ子昂は抑も何者であるか、宋朝の末世に仕へ、累進して翰林學士に擧げられ、殊恩を蒙りながら、一朝宋亡び元興るや、忽ち其の志を

翻へし、男子の尊ぶべき、節を屈して元朝に仕へ、其の身を全うしたではないか、されば書道に於ては彼は獨歩の稱はあるけれども其の心事に至ては二心を懐く劣士といふべきである、それで自分はその書を愛するも其の人を愛せぬから、之を机の上には置かぬ。

と、以て其の事を苟くもせぬ趣を看るべきであります。

(二十三) 東湖の讀書訓

一讀書は博きを貴び候得共、上迂り致し候ては何程萬卷を讀み候とて用を成し候はんや、古人の所謂眼光紙背に透ると申す如く讀みたき事に御座候。

次第々々後の世に生れ候ほど、讀書多く相成可申哉、七史讀めば相濟み候が、十七史と申す様相成、末が末に相成候はゞ、二十一史も五十史も讀み申さず候ては相成らず、譯合も博きを貴び候中にも、其要を得候様肝要と存候。

人の持前種々有之故、一概には申兼候得共、歴史等も唯だザツと讀み候よりは、何か一つ講究著述の心得にて讀み候方、格別に益を得候やう相覺申候。

制度の事も會機の事も、文辭の事も、名臣賢相の行狀其の外記憶致すべくと存候ては、大ていの人にては中々覺へ兼候、東坡が漢書を讀み候法など、面白く御座候、尙ほまた御切考御尤

日本偉人逸話
に御座候

(二十四)

坂本龍馬と西郷隆盛



坂本龍馬といふは幕末の豪傑で土佐山内侯の家臣、江戸の千葉周作に剣を學んで全士間に鳴り、それより國事に奔走し、後には薩長の間を調停して提携をなさしめた才物であります。此の人豫て西郷隆盛の盛名を耳にし、一度之に會つて見たいものと思ひ、勝海舟の添書を以て西郷に面し、大に其の人物の不測なるに驚いたといふことでもあります。其の時の批評が海舟の語として残つて居ります。龍馬が會ておれ(海舟)に向て言ふには、先生屢々西郷の人物を賞せられるから、拙者も行て會つて來るにより、添書を呉れといつたから、早速書いてやつたが、其の後坂本が薩摩から歸つて來ていふには、成程西郷といふ奴は、わからぬ奴だ、少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く、若し馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も中々鑑識のある者だ。

これにて兩雄の人物を窺ふべきであります。

(二十五) 勝海舟と西郷隆盛

明治元年戊辰の春官軍東海道を殉へ、軍を進めて江戸を攻めんとするや、西郷隆盛は總督府の參謀として品川に抵つたのであります、其の時徳川氏にも勝安房なる豪傑があつた爲に、自ら隆盛に會して將軍徳川慶喜 恭順謝罪の狀を陳べ、此に兩英雄の談笑によつて無事江戸城を總督府に明渡すこととなつたのであります、それに就て後日勝安房は西郷の大度量を稱揚して當時の狀を具さに人に語つた左の文字は即ちそれでありませう。

西郷の大度量に就て維新當時の模様を細かにいふと、官軍が品川まで推し寄せて來て今にも江戸城へ攻め入らうといふ際に、西

郷は、おれが出した僅か一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷まで、ノソノソ談判に遣て來るとは、中々今の人では出來ない事だ、さて彼の時の談判は實に骨だつたよ、官軍に西郷が居なければ、談はとても纏まらなかつたらうよ、其の時分の形勢といへば、品川からは西郷などが來る、板橋からは伊知地などが來る、又江戸の市中では、今にも官軍が乗り込むといつて大騒ぎサ、然し、おれは他の官軍には頼着せずして、唯だ西郷一人を眼においた。そこで今談した通り、極短い手紙を一通遣つて、双方何處にか出會ひたる上、談判致したいとの旨を申送り、又其の場所は即ち田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から選定してやつた、すると

官軍からも早速承知したと返事をして、愈々何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになつた。

當日おれは羽織袴で、馬に騎つて供を一人連れたばかりで、薩摩屋敷へ出掛けた、先づ一室へ案内せられて暫く待て居ると、西郷は庭の方から古洋服に薩摩風の引切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、是は誠に遅刻しまして失禮と挨拶しながら座敷へ通つた、其の様子は少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

それから愈々談判になると、西郷はおれの言ふ事を一々信用して呉れて、其の間に一點の疑念も挟まなかつた、即ちおれに對つて

色々六ヶ敷い議論もありませうが、私が一身にかけて御引受け

します。

と、斯ういふ西郷の一言で、江戸百萬の生靈も、其の生命と財産とを保つことが出来、又徳川氏も其の滅亡を免れたのだ、若し之が他人であつたら、否や貴様の言ふ事は自家撞着だとか、言行不一致だとか、澤山の兇徒がアノ通り處々に屯營して居るのに、恭順の實は何處にあるかとか、種々喧ましく責め立てたに違ひない萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ、然し西郷はそんな野暮は言はない、其の大局を達観して而も果斷に富んで居たには、おれも感心した。

此の時の談判が未だ始まらない前から、桐野などいふ豪傑連中が大勢で次の室へ来て竊かに様子を覗つて居る、薩摩屋敷の近傍へは官軍の兵隊がヒシ／＼と詰めかけて居る、其の有様は實に殺氣陰々として、物凄いとどであつた、然るに西郷は泰然として、四邊の光景には眼もくれず、悠々と談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つた。

そこでおれが門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊は、どつと一時に推し寄せて来たが、おれが西郷に送られて立て居るのを見て、一全恭々しく捧銃の敬禮を行つた、おれは自分の胸を指して兵隊に向ひ、何れ今日中には何とか決着致すべし、決定次

第にて或は足下等の銃先にかゝつて死ぬることもあらうから、よく／＼此の胸を見覺へて置かれよ、といひ捨てたまふ、西郷に暇乞をして歸つた。

此の時おれが、殊に感心したのは、西郷が少しもおれに對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終坐を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光で以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見へなかつた事だ、其の膽量の大いことは所謂天空海澗で、見識ぶるなどいふことは固より少しもなかつた云々。

(二十六)

西郷隆盛の磊落

西郷隆盛の偉人物であることは既に前に述べた所にも、其の一斑を了せられたるが更に久しく西郷に師事せられたる高島子爵（軻之助）の談話筆記を讀めば一層其の磊落魁偉の大人物たりしことを證明せられる、左に少しく少年諸氏の心得置くべき點を拔萃しませう

西郷先生の剃髮

南州翁は江戸城の受け渡しが済み、彰義隊の片がついてから歸國して頭を剃り、名を梅一と呼んで殆ど物外に閑臥し、超逸絶塵の生涯を恣にされて居つた、其の髮を削つた梅一先生が三中隊の兵を率ゐて越後方面に加勢に來られた、アノ容貌魁偉の大先生がクルク坊主になられたのだから、それは中々化け物の様だ、大入道でね、

實に見物だつたよ、しかし先生が到着の頃は軍情が一變して、大に優勢になり、長岡の城も再び落ちて居つたから、餘り大した戦争もなかつた、暫時新發田に屯して居つたが、庄内の鼠ヶ關の守りが堅くして容易に落ちないから、舟で秋田の方に應援に行く計畫をされたこともあつた、やがて米澤の藩でも全く歸順するし、山形の藩でも歸順だ、そこで山形の藩主は先生に面會したいといふから、日を期し場所を定めて面會するといふことにしたんだ、私はその時先生に陪從して後方に控へて居つたから、其の時の挨拶振がよく分つたやがて双方初對面の辭儀がある、そこで先生は『私は薩藩の西郷梅一と申す者で御座る』とやつた、西郷梅一と來ては、私共も實に

吹き出したかつたよ、縦令山形の様な小大名でも、兎に角一藩の主
 人であるし、又官軍を代表する儀式上の會見だから、梅一では流石
 にキマリがわるいと思つたか、梅一をヒツクリ返した其儘の一梅よ
 その真面目の状で西郷一梅とやられたのには殆どたまらなかつた。
 一梅といふ名の出所はこうじゃ、先生の宅、鹿兒島市の武村
 といふ處に、その頃より十餘年前に梅一といふ盲目の按摩取りが居
 つて、度々先生の内に入出して居つた、此の按摩が何でも、餘程風
 變りの按摩で、中々面白かつたとのことだ、先生が剃髮して閑居す
 ると、それに因んで梅一と名乗られたさうだ、その梅一を山形の藩
 主にヒツクリ返して『一梅で御座る』とやつたのである。

山形藩の歸順

その山形の藩主と會見の時、あちらでも降服歸順の意を表するので
 あるから、十分敬意を以て應對する、誠に慇懃を極めて居る、それ
 に對して總大將西郷一梅先生の態度も亦頗る謙遜じゃ、實に丁寧至
 極なもので、殆どどちらが歸順するのかわりやしない、その中會見
 も濟んだから、私は早速先生に向ひ、先生の御應待振りは餘り御丁
 寧に過ぎはしませんかと問ふたんじや、其の時先生は笑ひながら『
 戦争に負けて降伏するのぢやないか、官軍に對しては非常に怖がつ
 て居るのじや、彼の丁寧な様を見い、若し其の上、こちらから聲高
 くでも語るものなら、それは相手が決して意中を告げること何も

出来やせん、俺が慰懃にするのは、その爲じや』と申された、流石は餘裕の綽々たるものじや。

それに先生は會見が済むと直ぐ一人で其の城下の視察と出掛けられた、そんな處も偉人の人を疑はぬ態度で恐れ入つたものじや、昨日までの敵地じや、それを一度歸順となつて會見すれば、何の疑念もなく一人で巡廻された。

庄内の始末

山形より進んで今度は庄内の始末だ、庄内と會津は東北の雄藩で、戊辰の戦争も此の二藩最もよく戦つて居る、しかし此の時は降らざるものは只だ庄内一つで、既に四面皆包圍されて居つたからそこで

又謝罪降伏の談判があつた、一種の媾和條約だ、庄内の入口清川の手前古口といふ處であつた、表面の談判者は黒田清隆、西郷先生は隣室に控へて居られた、私もそこに附いて居つたのじや、やがて談判が済むと、又只だ一人ですぐ庄内に乗り込んで、鶴岡の城下に入り込んだ、黒田は表面の大將で城受取りにこれも直ぐ往つたが、西郷先生は坊主頭で大將の資格でなく、單身直に庄内の城下に行かれたのである、之は全く破天荒にして山形の巡視等とは違ひ、實に危険千萬な行爲であつた、庄内藩は薩摩屋敷焼打以來、全く犬と猿との様なもの、それが單身談判がすむと、直ぐ其の城下に行くといふのは、ドーも意想外だ、私もすぐ其の翌日はその城下に向つた、黒

田も匆々に形づけて引揚げたが、私はそれよりも前に引揚げた、先生もさうじやつた。

日本偉人逸話

七十六

陸軍大將のゴロ寝

明治四年に西郷先生は陸軍大將近衛都督兼参議で上京され、全時に藩藩から四大隊上京して御親兵となつた、其の時の兵營は市ヶ谷の尾州藩の屋敷であつたが、私共は即ち其の兵營に居つた、その折西郷先生は閑さへあれば、其の兵營に来て、私共と親しく隔意なく話すのみならず、食物も兵隊の食物をたべ、又時々泊つて行かれた、殊に夏など蚊が多くて而も先生の爲につる蚊帳がない、それで泊つて戴くのは大變嬉しいが、蚊帳のないのに閉口すると、先生はそんな

な事に少しも關しなくともよい、蚊帳などなければ、なくともよい之を貸し給へといつて、其の邊にある毛布をひき出し、其れを被つて椽側の素板の上にゴロ寝をされて居つた、度々そんな風を見て或人は南州翁をエライ物好きな人だと思ふたものもある、しかし先生の兵營に来て色々兵隊と寢食を全じうするは決して物數寄から出て居るのでも、策略から出て居るのでも何でもない、偉人英雄の自然の全情が偶然發してかくの如き有様を呈するので、別に意味ある譯でも何でもない、而も偉人の心事、凡骨の多くは想像だも出來ぬ一原因だ。

西郷先生の讀書

日本偉人逸話

七十七

行ひ餘力なれば則ち以て文を學ぶので、書物も色々讀んで居られた左傳なども好きであられ、日本外史、日本政記なども愛讀して居られた、王陽明のものも亦好んで見られたやうである、然しながら先生の識見は決して讀書から來たものではない、只だ天稟の資性である、しかし本なども固より見ないよりは益に違ひないが、要するに天稟である。

先生は歴史には中々趣味を持たれて居つたので、我々を集めての御話にも、兎角史上の人物が出て居つた、元弘建武あたりの忠臣義士なども度々聞かされた、先生は至て言葉不足ではあるが、お話は何となく隔意なく打解けての上だから大層面白い、私共は兎角先生の

宅に押かけて、色々の御話を承つたものぢや。

南州翁の謙讓

たとへば歸順の大名に會見した時、先生か餘り禮意慇懃なので、どちらが歸順か分らぬやうに思つたことは、今も話した事だが、先生は元帥といふ名前は用ひなかつた、そは陛下が大元帥で入らつしやるから、恐れ多いとて、只だ陸軍大將とのみ用ひられた、鹿兒島の藩主に申上ぐる時でも、沐浴齋戒して出づるのみならず、其の申上ぐべき事を一々紙に書いて見るのである、禮儀の點などは眞に心得たものである、この邊なども今の人が宜しく學ばねばならぬ様な事柄である。

(二十七) 西郷隆盛と西洋事情

村松山壽なる人の談話中に珍らしい談話が載つて居る、それは西郷が西洋事情に就て非常に之を知らんと心掛けたことである、曰く。

大西郷は常に西洋の事情に曉通することを非常に奨励して居た、宛も尺振八といふ人、英學者として當時有名であつたが、大西郷は此の尺氏を是非鹿兒島の藩校へ招聘して子弟をして西洋の事情に精通せしめたいものだと思ひ、思ひ切つて高い俸給で尺氏を招きに往つた、處が尺先生何と思つたか知らぬが『金で身は賣らぬ』といつたやうな權式で、其の招きに應じてくれない、百方説いたが駄目なので、今はこれまでなりと諦らめて、せめて子弟をば

托しやうと、息子の菊次郎氏を伴て尺氏の門に入らしめた。

當時尺先生は下谷練堀町で私塾を開いて居たので、弟子入ならばもとより辭する所はないと、快く入門を許したので、大西郷はそれで一先づ安心して歸藩した、其の後鹿兒島の藩の子弟にして苟も秀才者は残らず大西郷の紹介で尺先生の門に趨らしめた、實に努めたものだ。

一体大西郷は非常に人物を尊崇する性の人である、一旦與すべき人物であると思ふと、何處までも其の人に惚れ込んで終ふ、尺先生に對したのは正に其の轍なので、尺先生も大に大西郷の人を見るに明なるに服したといふ事である。

處が其の内に十年の役があつた、西南戦争に西郷方の青年は何れも翁を神の如くに崇んで居つて、割合に統一が保たれたが、其の思想上の統一もあつた、それも其の筈、重立つた人は皆尺先生の門人であつたのだ、尺氏門下の秀才も今は残つて居ない、多くは否殆んど凡ては、十年役に戦死を遂げたものである。

(二十八) 橋本左内と西郷隆盛

越前の橋本左内は景岳と號し、膽略非常中々の人物であつた、然るに体軀は矮小であつたたら、さしもの西郷も之を見誤まつたのであつた、寺師宗徳氏の談話中に曰く。

越前の橋本左内初めて南洲を訪ふ、左内は貌容婦人の如く、鬪々



たる一少年である、西郷乃ち語るに足らずと思ひ、天下國家の事

などは野暮だ、角力でも取て世を送らうと存ずるといひつゝ冷笑した、左内毅然として『足下人傑の名あるが故に來れば其の言斯の如し、實に望を失ふけれども試みに鄙見を陳せん』と云つて諄々天下の形勢を説く、卓識偉論、南洲覺えず肅然容を正し、默聽數時、頭漸く地に低る、左内陳し畢るや否や飄然袂を拂つて去つた、時に海江田信義坐に在り、南洲之に

對ひ歎して曰く『意はざりき天下復た斯の如き俊才あらんとは』と翌朝衣を更め、左内を訪ふて、其の不明を謝罪したといふ話である。

(二十九) 勝海舟の書生訓

海舟勝安房の言は人をして大に啓發せしむるものがあるが、左の書生を誠しめたる文字の如きは、大に青年の細讀すべきものであります。

人難に臨み、死を畏るゝは、固より鄙むべし、然れども速かに死するを以て快となすものも、亦貴ぶに足らず、本邦人は性慥急にして動もすれば輒ち死を決す、是れ其の弊なり、吾れ嘗て謂ふ我

が邦の武士は元龜天正の際より盛んなるはなしと、然れども當時の風尚は一死身を潔くするを以て能事畢るとなし、復た後患を顧みず、夫れ萬般の責任を一身に擔はんと欲せば、至艱至難に堪へ、綽々として餘裕ある者にあらざるよりは能はざるなり、嗚呼幕府の末造に方り、生死の途に出入し、窮厄を踏み、心膽を鍊り終に皇政維新の洪業をなしたるものは、既に黄土に歸せり、今の局に當る者は、概ね其の支葉のみ、此の後十年、當さに庶務を調理し、國威を振揚すべきものは、汝等書生の肩頭に懸る、汝等果して能く此の責任に耐ゆるか否らざるか、予が見る所を以てすれば、近時の書生は僅かに一二の學科を修め、多少の知識を具ふる

に過ぎず、而して天下は一大活物にして、區々たる死學問、小才子の能く辨ずる所にあらず、必ずや世間の慘風を凌ぎ、人生の酸味に飽き、世態を知り、人情を盡して然る後與に經世の要務を談すべし、吾れ後進の輩に告ぐ、宜しく身を困窮に投じ、實才を死生の際に磨くべきのみ。

實に痛切に時弊を論じて後人を戒めたものであります。

(三十) 西郷隆盛の膽勇

西郷隆盛が勝海舟と會見して遂に江戸城攻撃を中止し、其の全軍を品川に駐めて居つた時、鳥取藩の武士數名、隆盛の此の處置を專斷憎むべしと爲し、憤怒の餘り刺し殺さんと欲し、携へて旅館に至り

訪ふた、其の時密かに思へらく、隆盛は必ず多くの士を従へて面接するであらうと、力瘤を入れて待構へて居つた所、何ぞ計らん、其の出で來たのを見れば、粗服の儘に一人刀を提げ、挨拶もソコ〜に平氣に語つて曰く。

自分は元來粗放な田舎漢で、戦争の外には何にも知らぬ、實に戦は三度の飯よりも好物、且つや最も得意とする所である、然るに思はぬことには今度は江戸ツ子の勝にスツカリ欺されて仕舞つてどうにも仕方がなくなつた。

と、かく語り了て、アハ、と大笑したから、刺客は其の膽略勇氣に呑まれ、遂に手を下すことなく匆卒にして辭し去つたといふこと。

であります。

(三十一) 西郷隆盛の雅量

眼の寄る處へ玉とやら、西郷の家僕に熊吉といへる律義一徹の男があつた、眼に一丁字なけれども、よく道理を解したから、隆盛も之を愛して出入起居に之を伴ふた、所が或日太政官よりの歸り途で、熊吉を随へて市中の刀劍商店へ立寄り、古刀の類をひねくつて見たが、一向氣に入つたものがない、折しも一婦人の店頭を過ぐるを見ると、如何にも絶世の美人といひたいほどであつた、そこで隆盛も思はず見惚れ、傍なる熊吉に向ひ、小聲にて『熊……俺も斯る正宗が買ひ度いものぞ』と、此の一言を聞くや熊吉は何の返答もなく、

やがて邸へ還るや直ちに隆盛の前に出でさて容を正して『先刻の如きことは冗談にも仰せらるべきことでありませぬ』と、それより己が部屋に退いて、非常に決心せるものゝ如く少しも隆盛の用を辨じない、これは心に大に怨み怒つたからである、所が隆盛は一向平氣で別に用を命じやうともしない、かくて主従とも無言の儘なること三日で、而も食事もしないのであるから、さすがの隆盛も腹が空つて溜らぬ、而も思へば律義者にアンナ冗談を言つたのがよくないと直ちに熊吉を座に延き、言葉を和らげて曰く『熊……實は俺が悪かつた、容赦をして呉れい、汝の言は實に道理である』とかく言はれて熊吉は漸く意解け、せつせと主用を辨じ、始めて食を共にするに

至つたといふことでありますが、かく主人にして下僕の無禮を咎めず、且つ自ら謝罪する隆盛の雅量や實に敬服すべきものであります。

(三十二)

西郷隆盛修養訓

平生道を踏まざる人は事に臨みて狼狽し、處分に苦むものなり、例せば出火の時、平生處分あるものは動搖せずして取り仕末も能く出来るべしと雖も、平生處分なきものは、唯だ狼狽して措く所を知らざるに至る、平生道を踏み居る者にあらざれば、事に臨みて策略は出でざるなり。

一 道は天地自然の道にして、人は之を行ふものなり、故に天を敬

するを以て目的となす、天は人も我も全一に愛す、故に我を愛する心を以て人を愛すべし。

一 人を相手にせず、天を相手にして己れを盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

一 人を籠絡して、陰に事を謀るものは、其の事成ると雖も、活眼より之を看れば、其の醜言ふべからず、人に推すに公平至誠を以てせよ、至誠公平ならざれば、決して英雄の心を攬くこと能はず。

一 命も入らぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は始末に困るなり、此の始末に困る人ならでは艱難を共にし、國家の大業を成すこと能はず、然れども、此の如き人は、凡俗の眼には見るべから

す。

- 一 身を修むるには克己を以て終始せよ。
- 一 道を行ふ者は、天下舉げて毀るも足らずとせず、天下舉げて譽むるも足れりとせず、これ自ら信ずるの厚きが故なり。
- 一 己れに克つに、事々物々、時に臨みて克つ様には克ち得られぬなり、平生氣象を以て克ち居るべし。
- 一 道を行ふには尊卑貴賤の差別なし。
- 一 男子は人を容れ、人に容れられては、濟まぬ者と思へ。
- 一 人の意表に出で、一時の快適を好むは、未熟の事なり、戒むべし。

- 一 堯舜を以て手本となし、孔夫子を以て教師とせよ。
- 一 平日道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、處分の出来ぬものなり。
- 一 事には上手下手あり、物に出来る人、出来ざる人もなし、故に只管道を行ひ道を楽しむべし。
- 一 作略は平日致さぬものぞ。
- 一 眞誠の機會とは、理を盡して行ひ、勢ひを審かにして動くをいふにあり。
- 一 世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當て上たげるをいふ。
- 一 聖賢に成らんと欲する志なく、古人の事蹟を見て、迎も企て

及ばぬといふ様な心ならば、戦に臨みて逃るゝより猶ほ卑怯なり。

一 天下後世までも、信仰悦服さるゝものは、只だ是れ一箇の眞誠なり。

一 平日國家天下を愛る誠心厚からず、只だ時のはずみに乗じて、成し得たる事業は決して永續せぬものぞ。

一 何事も平日の用意は肝腎ぞ。

一 才に任して爲す事は危し。

一 忠孝仁愛教化の道は政事の大本なり。

一 事に當り思慮の乏しきを憂ふることなかれ、凡そ思慮は平生黙

坐、静止の際に於てすべし、時に應じ十に八九は履行さる。

一 過を改むるに、自ら過つたとさへ思へば、それにて善し、其の事をば棄て、直に一步踏み出すべし。

一 文明とは道の普く行はるゝの謂なり、宮室の壯嚴、衣服の美麗、外観の華をいふにあらず。

一 人智を開發するには、愛國忠孝の心を開くなり。

一 過ちを悔しく思ひ、取締はんとて心配するは茶碗を割り、其の缺けを集め合せ、見るに全じ、詮なき事なり。

一 人材を採用するに、君子小人の辨、酷に過ぐる時は、却て害を引起すものなり。

- 一 道義に於ては、一心を顧みず、必ず踐行すべし。
- 一 世上、十に七八は、小人なり、よく小人の情を察し、其の長所に應じて材藝を盡さしむべし。
- 一 至誠は當世に知られずとも、後世必ず知己あるものとす。
- 一 味噌汁の辛さも甘さも下婢を叱するに及ばぬ事なり。
- 一 正道を以て行けば、目前には迂遠なる様なれども、先さに行けば成功は早きものなり。
- 一 實なくして世に譽めらるゝは、僥倖の譽れなり。
- 不養虎兮不養豹、元是九州西一涯、
- 七百年來舊知處、百二都城皆我儕、

歴倒海内三尺劍

蹂躪天下七寸鞋



人若欲識余居處、永住鹿城千石街

(三十三) 橋本左内の振氣説

立て、振り起し、心のなまり油断せぬやうに、致す儀なり、此の氣は生ある者には皆ある者にて、禽獸にさへこれあつて、禽獸にても

氣とは人に負けぬ心立ありて
 耻辱の事を無念に思ふ處より
 起る意氣張の事なり、振とは
 折角自分と心をとめて振り

甚だしく氣の立ちたる時は、人を害し人を苦むることあり、まして人に於ておや、人の中にも士は一番此の氣強く有之故に世俗之を士氣と唱へ、何程年若な者にても兩刀を帶したる者に不禮を致さぬは、此の士氣に畏れ候事にて、其の人の武藝や力量や位置のみに畏れ候にてはこれなし、然る所太平久しく打續き、士風柔弱佞媚に陥り、武門に生れながら、武道を忘却致し、位を望み女色を好み利に走り、勢に附く事のみ耽り候處より、古の人に負けぬ耻辱のことは堪へずと申す、雄々しき丈夫の心碎けなまりて、腰にこそ兩刀を帶すれ、太物包みをかつぎたる商人、樽を荷ひたる樽拾ひよりも劣りて、纒かに雷の聲を聞き犬の吠ゆるを聞いても卻歩する

事とは成りけり、云々。

(三十四) 木戸孝允の人物

明治維新の三傑と稱せらるゝ一人松菊木戸孝允は忠誠無二の國士で、其の奔走盡力にて諸侯の藩籍奉還といふことが遂に成就したのであります。其の人物に就いては勝海舟が左の如き評を下し、逸話を語つて居ります。

木戸松菊は西郷に比べては小なる所があるが、然し綿密なものであつた。

會て京都で會つた時、彼れが直接おれに話して聞かせたことがある、元治元年の七月に、蛤御門の變があつた後で、あの男は會津

日本偉人逸話

百

藩の邏卒に捕へられて、大勢の兵卒に護衛せられながら寺町通りまで来た時に大便を催したから厠へ行かせてくれといった、する



イキナリ脱兎の勢で其の場を逐電した、餘り意外の事だから衛

と他の事とは違ふから、衛士も許さぬといふ譯にも行かず、止むなく二三人の兵卒を随へて厠へ行かせた、所が松菊は厠の前まで来る、地べたへ蹲踞つて袴を脱ぐやうな風をして居たが

卒も暫らく茫然として居る間に、松菊は早くも對州の藩邸へ逃げ込んで、一旦其の踪跡を晦まし、暫らくして又ある他の屋敷へ潜伏して到頭逃げおほせたといふことだ、あの男が事に臨んで敏活であつたことは、マアかういふ風だつたよ、それからアノ男が下ノ關で兵士を鎮撫して居た時分に、或人へ送つた清元がある。きのふ二上り、けふ三下り、調子そろはぬ糸筋の、細い世渡り日渡りも、其處でなぶられ、此處ではせかれ、主の心に誠があらば、つらひ勤めも厭やせぬ。斯ういふのだが、どうだ、面白いよ。

偶 成

孝 允

一穗寒燈照眼明、沈思默坐無限情、
 回頭知己人已遠、丈夫畢竟豈計名、
 世難多事萬骨枯、廟堂風色幾變更、
 年如流水去不返、人似草木爭春榮、
 邦家前路不容易、三千餘萬奈蒼生、
 山堂夜半夢難結、千岳萬峰風雨聲。

(三十五) 大久保利通の膽勇

明治維新の元勳であつて、三傑の一に數へらるゝ大久保利通は少壯より血氣に満ち、勤王論を唱へて京攝の間を往來して居た、或日の事全士有馬某なる者と共に京都の市中を散歩して居つた所が、時し

も他藩の武士が此方を指して來るに逢ふた、然るに彼等は無賴群を成す輩と見へ、殊更に利通に近づき、故と刀の鞘を觸れて喧嘩を求め、切りに悪言を極めた、此の時熱血湧く如き利通何とて黙すべき直ちに起つて之に應じた、所が全士有馬某は利通に後ること一丁ばかりであつたから、此の危急を見て駆け來て利通を援けんとした時に喧嘩は漸次大きくなり、三人刀を抜き連れて利通に突進したのを利通怖るゝ色もなく、一步後ろに飛びすさると見る間に、眞先に進み來る一人の面上にブツと唾を吹きかけた、そこで彼れは思はず袖を以て之を拭はんとするのを、利通電光石火と飛び込み、一刀を彼の額上加へ梨割にして仕舞つたから、此の勇氣と手際とに他の

二人は氣を吞まれ驚き入て、早速踵を反し、後をも見ずして逃げ失せたといいふことでもあります、士は常に豫め此の機敏がなくてはならぬのであります。

(三十八) 利通と東京遷都

西郷隆盛と勝安房との會見にて無事なるを得たる江戸城も、當時幕府覆没の事として恰も火の消へたる如き慘狀であつたのを、復び舊時の繁盛に回復したのは、兎に角遷都の事が斷行せられたからであるそれに就ては大久保利通の盡力は一方でなかつたといふ。勝海舟當時の事を語つて曰く。

さて西郷の一諾で、一先づ事は治まつたが、茲に一つの困難とい

ふのは、是から先き江戸の人民をどう始末せうかといふ問題だ、



然しおれの方では徳川の城さへ明け渡せば、後は皆官軍の方で適宜に始末するだらうと見て居つた、所が西郷も相應には人が悪いサ、府下の事は何も彼も、勝さんが御承知だから、宜しく

お願い申すといつた、おれも忌々しかつたけれども、仕様がなから、どうか斯うか手を着けかけた所が、大村益次郎などいふ男

が、おれを悪んで、兵隊なんか差向けて酷く意地めるので、餘り馬鹿々々しいから、家へ引込んで、それなり打ち遣つて置いた、すると、大久保利通がやつて来て、是非々と懇ろに頼むのだから、それではと、おれも愈々本氣に肩を入れる様になつたのだ。この江戸の市中の事は、おれは豫て精密に調べて置いたのだが、當時の人口はザツと百五十萬ばかりあつた、その内徳川氏から扶持を貰つて居つたものは勿論、その他諸大名の屋敷へ出入りする職人や商人などは、皆直接間接に幕府のお蔭で食ふて居たのだから、幕府の瓦解と共に、こんな人達は忽ち暮しが立たなくなる道理だ。

全体江戸は大阪などは違つて、商賣が盛んなのでもなく、物産が豊かなのでもなく、たゞ政治の中心といふので、人が多く集まるから繁昌して居たばかりなのだ、それ故に幕府が倒れると斯うなるのは、固より知れ切つて居る事サ、就いてはこの人達に何か新たな職業を興へなければならぬのだが、何しろ百五十萬といふ多数の人民が、食ふだけの仕事といふものは容易に得られない、そこでおれは、この事情を精しく大久保に談したから、流石は大久保だ、それでは断然遷都の事に決せうと、かういつた、即ちこれが東京今日の繁昌の基だ。

して見ると、東京市の大久保に負ふ所や大なりといふべきである。

(三十七)

利通の偉人觀

利通は座右銘として左の文字を記して居るが、之にて其の偉人を見ることが大なるを知るべく、又自ら勉めたことの篤きをも知らるゝのである。

一、創業の才と守成の徳と、兩つながら之を有し、氣は宇内を併呑し、行は一世を感せしむる人は誰ぞ。

一、温厚篤實にして、仁慈の情に富み、清廉勤儉にして正義の道を守り、信は以て人を服し徳は以て人を懐くるの人は誰ぞ。

一、高潔なる理想と爛熳たる感情と、遠大なる目的を有する人は誰ぞ。

一、一方に拘泥せず、時勢の潮流を察して、人心の機微を見、以て世に先だつの爛眼を有する人は誰ぞ。

一、正義を守り、自由を重んじ、真理の在る所、水火も辭せざるの人は誰ぞ。

一、外、剛健にして、中抜くべからざるの至誠と、奪ふべからざるの熱情を有するの人は誰ぞ。

(三十八)

伊藤博文の洋行苦心

伊藤博文が英國に洋行するに至つた當時の状況は全行者井上侯爵が嘗て語れる所にて其の一斑を知ることが出来る、其の要を摘めば左の如くである。

日本偉人逸話

さて愈々出發といふ事に決定して、其の頃は最も親しうして居たし、英語も出来る所から、吾輩と伊藤と二人で行く事になつた、所が吾輩は公然行けるが、伊藤は表向き政府の許可が出んから、止むを得ず、亡命の姿じや、二人の外には是非全行したいといふので、山尾庸三、遠藤金助、及び北海道に居た井上勝が英語が巧いといふので、通辯として全行する事になり、一行は都合五人となつた。

斯様にして凡ては決定したが、困つたのは財政で藩より貰ふのは僅か一ケ年二百五十兩といふのじやから、一人すらも足りぬ位なのに、五人で遣つたら一ケ月も危い、そこで當時陸軍に居た村田

藏六の處へ往て、恚うしく云ふ譯で今度外國へ往くのやじが、金が足りんから金を五千兩是非とも貸して呉れ、出来なければ首を貰ひたいと亂暴至極な手詰の談判を持込んだ、村田も初めは中々承知しなかつたが、遂々貸して呉れた。(此の村田藏六は大村益次郎なり)

そこで今度は英國領事のカバーといふ人に乗船やら何やら面倒な世話を頼むと、氏は快く之を引請け、横濱英一番のチャーターマチソンの船で渡航することとなつたが、前言ふ通り、何分亡命の姿で行く事だから、酷だ氣が氣でない、乗船すると、直ぐに一行は石炭庫に案内された、漸と香港に着いて英一番の支店に上陸

すると、直ぐ支店長が来て、何か聞くけれども誰一人として何を云つてるのか解るものがない、只井上勝が少々解る筈だから、全人を總代として聞かせると、日本人の話す英語とは全で違つて居るので、何の事か薩張り解らぬけれども、何うも、何の爲に行くのかといふ事らしいといふので、吾輩は以前横濱で購求した英語の辭書で漸とうる覺えに覺えて居たネビゲーションといふ一字を思ひ出して、何でも構はん、此の一語さへ云へば、先方で海軍研究と悟つて呉れるに相違ないと思つて、思ひ切つて唯だ一語ネビゲーションと遣付けた、すると支店長も親切な人で、航海術といふからには必と水夫志願に相違ないと早合點して、早速吾輩等を

帆船に乗込ます様心配して呉れたのは宜いが、その帆船は僅か二人しか乗れぬといふので、止むを得ず、吾輩と伊藤と二人先づ乗込む事になり、他の三人は残して一先づ出帆したのじや。船では吾輩等を水夫志願と思ふて居るから乗ると直ぐに色々水夫の仕事させられる、何しろ、臍の緒切つて始めての事ぢやから随分辛くて遂には腹立たしくもなつたが、仕事をせねば飯は食へぬ次第じやから、我慢をして働いて居た、其の疲勞なる事といつたらお話にならん、それで一食が鹽豚一片に黒パン一片といふのだから、腹も非常に空く、實に辛い事此の上なかつたが、其の内段々水夫の仕事も覺えて來、勞働も手慣れて仕舞つたので、遂

には帆柱の頂上に登つて、種々の仕事も出来る様になつた。忘れもせぬ、船はベケヂスといつて總噸數僅かに三百噸の帆船、此の小舟で大西洋を横断し、遠く喜望峯を迂廻して倫敦へ行かうといふのだから、今から思ふと、實に危険千萬な次第で、上海を出てから、恰度四ヶ月と十日目に漸々倫敦に着いた、悦んで上陸して見ると、跡に残した三人が既に來て居たには二人ともアツと驚嘆した云々。

(三十九)

伊藤博文と佐久間象山

公爵伊藤博文が未だ俊介といつて國事に奔走して居つた青年時代に今の侯爵井上馨氏と共に當時の偉人佐久間象山を尋ねたことがある

全行には山縣日下などの人々もあつたが皆これ攘夷思想に鎖された人物で有た、然るに象山は伊藤以下の青年を引見して云へらく。攘夷も宜いけれども、諸君はどうして之を實行する積りかそれが解らん、口先きばかりで言ふて見ても、何の役にも立たん、又軍艦の一艘も持つて居らんで、出来る筈はないか、だから此の際は進んで先づ開國し、總ての事物は十分に研究し、一切の準備が調ふた曉に至て一舉に事を擧げるの外はあるまい。と、此の一言に青年共の頭が漸くに開け、伊藤井上等は茲に海軍研究の一念を固め、之を君侯に願つて一度は叱られたが、愈々熱心に願つて、遂に外國に派遣して海軍を研究せしむといふ名の下に、一

日本偉人逸話
ケ年二百五十兩を給さるゝ事となつたのであつた。

(四十) 伊藤博文の信仰



て祈願した、その著しきものが、三度あつたといふ、即ち第一は皇

伊藤公は元來恬淡な人で宗教に對しても別に一宗派に差別を置かず、唯だ神道は國教として隆盛ならしむべしといふ意見位であつた、然し其の信仰はかゝる形式的の方でなく一朝事ある時には心身を凝め

太子殿下が大患に惱ませられた時、第二は日露開戦の際、第三は皇太子殿下の御渡韓の砌で、何れも伊勢太廟に祈願したといふことである、其の外公の常に身邊を離さなかつた佛像がある、それはハルビン遭難の際にも携帶したと傳へられて居るが、佛体は金屬製の虚空藏菩薩であつたといふ、何故に之をかく珍重したかといふに、抑も此が像は藤原藤房卿が楠公父子の善提を吊ふため、自身鑄造したもので、之を頸に掛けて日本全國を廻國したさうであるが、其の後どうしたものか熱海の某寺院に保存されて居た、佛身は約四寸もあつて、右手に明智を現した利劔を持ち、右手に一切の福德を表はした如意寶珠を捧げて居つて、それが金製の厨子に納められて居たので

ある、それを公が全地に遊べる際手に入れたといふ、時は明治二十六年の春であつた、恰も全年の暮れ、公始め三浦、鳥尾、谷の諸將軍が持寄り忘年会を催した席上、公が該佛像の手に入つたことを三浦將軍に話すと、將軍は佛像の由緒は正しくとも、精神がなくなれば役に立たぬ、宜しく目白の雲照律師に開眼供養を請ふべしと勧めた、所が公も其の氣になり、佛像を目白に送つて翌年正月元日より全七日まで雲照律師の開眼供養を請ふた上に、公自身庭園の花を供へ畢生の守本尊としたのである、其の後公は日清戦役當時に聖上に供奉して廣島大本營にあつた時も、又海外に赴いた際も、片時も此の像を身より離さず、自ら名香を供へて祈念しつゝあつたといふ。

(四十一) 岩崎彌太郎の硬骨

郵便汽船三菱會社の社長として終に一代の富豪となつた岩崎彌太郎は少年時代より剛毅にして人に屈せぬ概があつた、されば歳十四にして早くも奇童の名を郷里土佐國安藝郡に馳せ、出で、高知に遊びて、岡本壘浦の門に入り研學怠りなかつたが、安政五年歳二十五にして江戸に出で、當時の碩學安積良齋に就きて益々經史の蘊奥を究めんとした、所が其の父彌三郎一朝村吏と事を争ふて誣告せられ、爲に禍に罹ると聞いたから、彌太郎は大に驚き、直ちに歸國の途に就いた、されど固より一文の旅費を携へぬことゝて、途々乞食して餓を凌ぎ夜は山野に臥し、晝は道を急ぎ、辛苦を嘗めて漸く郷里

に歸つたのである、而して其の足にて直ちに郡奉行の役所に到り、父の罪なきことを訴へた、其の時奉行は村吏と結托して居つたのであるから、此の訴を聞ても少しも取上ない、そこで彌太郎大いに怒り、夜、廳門に到り門の柱を削つて之に左の聯句を大書した。

官以三賄賂一成。

獄因三愛憎一決。

之を見たる奉行は大に怒り、直ちに之を削り取らせた。所が彌太郎は又もや之を廳の外面の壁に前の如く大書した、そこで奉行は、此の如きことをするは、何人の所爲なるかと、命じて筆者を搜索せしめ、終に彌太郎を捕へたのでこる、その時奉行は彌太郎を責めて、これ汝の書する所ではあるまい、何人かの命を承けたのであらうと

之を聞ける彌太郎は一時黙して居つたが、屢々問はれて、毅然として答へ、其の實を告げて大に氣焰を吐いたのである、それが爲に彌太郎は不屈者であるといふので、其の居村及び城下の周圍四ヶ村内に住居することを禁せられた、そこで彌太郎は止むなく神田村に屏居し、日夜書を読み時勢を慨したが、之が爲に其の名聲大に高まり吉田東陽の知る所となり、爲に後藤象次郎坂本龍馬等と交通するを得たのであつた、この硬骨が終に明治の海運業に一生面を開き、東海の霸王として後來の大成功を齎らすに至つたのであります。

(四十二) 後藤象次郎の勇猛

岩崎彌太郎と全じく土佐の出身にして維新の大業に功勳のあつた後

藤象次郎は高知藩士であつたから、夙に其の膽氣を君侯に認められ、幡多郡奉行となり、近習目付より御用役となり、幾くもなく職を罷めて江戸に遊び、歸國後直ちに大目付に擢んでられ、其の冬參政に轉じ、慶應三年には家老に進み、爾來山内侯を佐けて國事に奔走し、全藩士坂本龍馬等と交り、終に將軍徳川慶喜をして政權を返上せしむるに勉めたのである、此の如き膽略があつたから、慶應三年には維



るに勉めたのである、此の如き膽略があつたから、慶應三年には維

新政府の參與に任せられ、明治元年正月には外國事務掛を兼ねたのであるが、當時徳川氏は尙ほ大兵を擁して江戸に在り、關東、東北の諸藩概ね之に屬し、其の威勢京都に譲らなかつたから、外國駐割の使臣等は爲に政權の所在を疑ふほごであつた、そこで象次郎は各國使臣をして此際先づ參内謁見し、それによつて實際政權の在る所を知らしむべしと論じ、其の議採用せられ、全年正月晦日を以て佛、蘭、英の三國公使を宮中に參内せしめたのである。

所が外臣の參内といふは、此の時が最始であつたから、象次郎は接伴掛となり、中井弘藏と共に英國公使パークスを知恩院に迎へて四條躰手に出た、然るに豫て攘夷の考より外人をねらひ居たる大和

五條の人林田貞賢外一人は突然出で、公使を要撃し、護衛の騎兵數騎を斃し進んで公使に迫らんとした、そこで中井出で、之と戦ふたが、此の刺客林田は最も劍道に達して居つたから、進退輕妙にて、爲に中井の頭を斬り、之に重傷を負はせた、之を見たる象次郎蔦然に駆け来て横さまに林田を斬て一刀に之を斃し、パークス及び中井を助けた、そこでパークスは參内せずして引返し、三月三日更めて入朝したのであつた、所が此の事英國に達したから女皇ビクトリア陛下は象次郎及び中井の功を賞し、各一口の劍を贈られたのである、其の劍は長三尺鞘は銀製で、之を飾るに黄金寶石を以てし劍の頭に獅子の頭を彫り、中身には皇帝の名を署し、後藤象次郎に贈る

の文があつて、これ全國殊功の將官に賜ふ所であつたといひます。

(四十三) 田中平八の武功

天下の糸平と稱せられて、我が明治維新後の舞臺に商傑の名を博した田中平八は、彼が商界に名を成すまでは、實に慷慨國に許した男子といつてよいほどであつた、されば自分は商業に従事しながらも嘉永元年に郷里信濃國伊那を離れて先づ魚類を商ひつゝ尾信二州間を往來し、一日感ずる所あつて劍道を齋藤某に學び、安政六年横濱開港の事あるや、生糸、製茶等を買送りて貿易上の利を博し、萬延元年商業を以て中仙道を往來して、志士清川八郎と會し、之と國事を談じて盟約し、文久三年には製茶を積んで之を横濱に送らん

とし、四日市より汽船に積み出で暴風に遭ひて其の船沈没し全く損害をしたが、全時に全船の士伴林六郎を救ひ又國家社會の爲に盡力することを誓ひ、元治元年京都に赴き、其處にて志士吉田大三郎、古高頼母等に會し、意氣投合して深く交誼を結び、一日吉田氏と共に佐久間象山を請じて其の卓論に感服し、全年六月五日幕吏來て其の旅宿を襲ひ、吉田、古高等を捕縛した時には平八密に吉田氏の書を懐にして大阪に脱し、之を全志久坂義助（玄瑞）に渡し、與に約する所あつて袂を別ち、再び佐久間象山を京都に訪ふて、前途の得失を問答し、大に感ずる所ありて江戸に來り、深川の材木商某方に寄食して機會を待ち、大に成す所あらんとした、適々水戸藩の士

藤田小四郎、田丸稻野右衛門等事を筑波山に擧げたと聞き、直に材木を伐出すといふを名として發足し、終に其の軍に投じ、其の軍敗るゝや、藤田等と共に武田伊賀の軍に加り、大に幕兵と那珂港に戦ひ、軍議の武田氏と合はぬ所より再び江戸に歸らんとして途幕兵に捕へられ獄に在ること數旬、後ち放免せられて横濱に達し、時しも資産なき所より神奈川、程ヶ谷間の驛夫となつて働き、後横濱の商人大和屋三郎兵衛に寄食して洋銀賣買の業に従ふて漸く資金を得、慶應元年七月一日兩替店を同港に開きて始めて獨立の商人となり、明治元年春甲州にて官軍を助けて幕兵を敗走せしめ、五月江戸で彰義隊と戦ふて功があつたのであるが、爾後全く商人として實業界に

日本偉人逸話
大活動を爲したのであります。

(四十四) 古河市兵衛の勤勉

銅山王として又丁髷大臣として明治實業界に一異彩を放つた古河市兵衛も、其の元は京都の豆腐賣から出世したもので、要するに其の出世は立志勤勉の外に出ないのである、十八歳の時京都の町を豆腐を賣り歩いて居ると、向ふより一挺の駕籠が來て衝突し、豆腐箱を引くりかへしながら、駕丁は知らぬ顔で過ぎ去らんとした、そこで市兵衛駕丁を追かけ、大論判を始め、爲に輿の中より金一圓を出して詫びた人を見るとそれが得意先の主人であつたから、閉口して其の場を去つたが、思へば金のない爲に、かく自分に理がありながら

實際上負けねばならぬのである、之は奮發して金持にならねばならぬと、キツと志を決めたのが、抑々幸運を攫む動機となつたのであります。



そこで繼母の兄の木村利助といふ叔父を陸中盛岡に尋ねて京都を出で、其の家に留つて叔父の金貸業を助け、其の叔父の紹介で鴻池盛岡支店へ入り生糸賣買を擔任し、當時江戸にて盛名ありし小野組の福島支店長古河右左衛門に見込まれて、

之が養子となり、木村の姓を古河と改め、やがて小野組糸店の主人

となり主人善右衛門の信用を受け、明治三年に新に製糸場を築地に設け、全七年小野組にて生糸の傍ら鑛山採掘業を開くや、市兵衛大に勉め、小野組零落の後には獨力にて越後草倉銅山を買占め次に足尾銅山を採掘して、何れも山を嘗て天下の富豪となつたのであります。或はいふ、市兵衛が京都にあつて着のみ着の儘の小僧であつた時、近所の露店で大福餅を賣れる婆さんがあつて、大に市兵衛を愛し、自分の臍繰として溜めた二百兩を市兵衛に資本として貸して呉れた、それが爲に市兵衛は大に喜び、證文を入れて借りたが、成業の後、件の婆さんを招き、厚く昔の恩を謝し『御恩借の二百兩はいつまでも使はして戴きませう』とて元金は返さず、年々利息として

二百兩を贈り、老後を安樂に過させたといふことであります、これ等の舉動が大に世人と異なつて居る所でありませう。

(四十五) 中村敬宇の自尊説

明治維新後の宿儒として全人社を起し、専ら名教の維持に勉めたる敬宇中村正直は、頗る獨立自主の精神に富んだ人で、之が爲に世に有名なる西國立志編を譯述し、世の青年を警醒したが、嘗て毀譽賞罰を以て男子事を爲すの標準としてはならぬとて、左の言を爲したのであります。

大抵教法修身、經濟、格致、醫療等諸學に於て、今日有形無形の大利益、大惠澤となれる者は必ず之を首唱することあり、その之

を首唱するの時に當ては、或は國主に抗し、一世を敵に受け、或は衆人に毀られ、顛狂とも痴愚とも、山師とも、好き放題なる名を付けられたるものなり、又獨自一己を信し、千辛萬苦を忍び、人間の賞罰、衆人の毀譽を馬耳東風に付したる人なり、嗚呼時俗の論ほど恃むに足るものはなし、眼前の賞ほど慕なきものはなし、世の子弟及び年少の人に告ぐ、勉めて大志を立て、各其の才の近きところに従ひ、一學科、一藝術に専心勉強し、時俗の毀譽を顧みず、自己の品行を砥礪し、一世を裨益する人となるを期すべし、果して然らば、或は一世より許可せられて、勳等の牌鈕を禮服の上に着得らるべし、若し又王法の賞に漏るゝとも、後世に

至り、更に之に増したる尊榮を受け得らるべし。(中略)
 人民たる者は若し王法時論の外に賞罰毀譽あらずと思ひ、世末の賞罰といふことも知らず、身後の榮名といふことも知らず、殊に目前の賞、生前の事に着意し、これのみを無上の賞典なりと思ふときは、抑々末なり、世に窮簷陋屋の中において濫褻を着け、糟糠を食ひ、一己を節儉にして他人を利益し、職業を勉めて邦國を富足ならしむるの人あるべし、王法の賞の及ぶ所にあらずとも、皇天の褒賞必ず疑ひあるべからざることなれば、努力せざるべからず、英國名士の語に『職分を盡し良心に背かざるは中夜の樂聲なり』と、蓋し人たるものは、其の行爲必ず先づ自己の良心より

日本偉人逸話
賞與を受くべきなりと。

これ人格を重んぜる語として大に服膺すべきであります。

(四十六) 山岡鉄舟の家訓

明治戊辰の際、勝海舟、大久保一翁等と力を合せて將軍徳川慶喜を佐け、恭順職を解かした鉄舟山岡鉄太郎は劍を善くし、書に巧に、禪にも通じ、一世の奇傑であつたが、其の家訓は大に青年の味ふべきものであります。

- (一) 虚言いふべからず候
- (二) 君の御恩は忘るべからず候
- (三) 父母の御恩は忘るべからず候
- (四) 師の御恩は忘るべからず候
- (五) 人の御恩は忘るべからず候
- (六) 神佛並に長者を粗末にすべ

- からず候
- (七) 幼者をあなどるべからず候
- (八) 己れに快からざることは他人に求むべからず候
- (九) 腹を立つは道にあらず候
- (十) 何事も不幸を喜ぶべからず候
- (十一) 力の及ぶ限りは善き方に盡すべく候
- (十二) 他を顧みずして自分の善き事ばかりすべからず候
- (十三) 食するたびに、稼穡の艱難を思ふべし、草木土石にても粗末にすべからず候
- (十四) 殊更に着物を飾り、或は上べをつくらふものは、心に濁りあるものと心得べく候
- (十五) 禮儀を亂るべからず候
- (十六) 何時何人に接するも客人に接する様に心得べく候
- (十七) 己れの知らざる事は何人にもならふべく候
- (十八) 名利の爲に學問技藝すべからず候
- (十九) 人にはすべて能

不能あり、一様に人を棄て、或は笑ふべからず候(二十)己れの善行をほこり顔に人に知らしむべからず、すべて我が心に耻ぢざる様つとむべく候。

(四十七)

福澤諭吉の修身要領

明治維新前慶應年間に東京三田に義塾を開き、爾來文明の新空気を我國に吹き込み、獨立自尊の精神を高めたのは福澤諭吉翁である、而して翁自ら町人を以て任じ、一生を無爵無位に甘んじて、人才教育に盡したのは、亦以て偉人とすべき點である、其の修身要領はよく其の抱負と識見とを洩して居る。

凡そ日本國に生ずる臣民は、男女老少を問はず、萬世一系の帝室

を奉戴して、其の恩徳を仰がざる者あるべからず、此の一事は滿

天下何人も疑を容れざる

所なり、而して今日の男女

が今日の社會に處するの道

を如何にすべきやといふに

古來道德の教一にして足ら

ずと雖も徳教は人文の進歩

と共に變化するの約束にし

と其に變化するの約束にし

て、日新文明の社會には、自ら其の社會に通ずるの教なきを得ず即ち修身處世の法を新にするの必要ある所以なり。



一、人たるの品位を進め、智徳を研ぎ、ますく其の光輝を發揚するを以て本分と爲さるべからず、吾黨の男女は、獨立自尊の主義を以て、修身處世の要領と爲し、之を服膺して、人たるの本分を全うすべきものなり。

二、心身の獨立を全うし、自ら其の身を尊重して、人たるの品位を辱しめざるもの、之を獨立自尊といふ。

三、自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず。

四、身体を大切にし健康を保つは、人間生々の道に缺くべからざるの要務なり、常に心身を快活にして、苟めにも健康を害するの不

養生を戒むべし。

五、天爵を全うするは、人の本分を盡すものなり、原因事情の如何を問はず、自ら生命を害するは、獨立自尊の旨に反する背理卑怯の行爲にして、最も賤むべき難所なり。

六、敢爲活潑、堅忍不屈の精神を公にするにあらざれば、獨立自尊の主義を實にするを得ず、人は進取確守の勇氣を缺べからず。

七、獨立自尊の人は、一身の進退方向を他に依頼せずして、自ら思慮判断するの智力を具へざるべからず。

八、男尊女卑は野蠻の陋習なり、文明の男女は全等全位、互に相敬愛して、獨立自尊を全からしむべし。

九、結婚は人生の重大事なれば、配偶の選擇は最も慎重ならざるべからず、一夫一婦終身全室、相敬して、互に獨立自尊を犯さざるは、人倫の始なり。

十、一夫一婦の間に生るゝ子女は、其の父母の他に父母なく、其の子女の他に子女なし、親子の愛は眞純の親愛にして、之を傷けざるは、一家幸福の基なり。

十一、子女も亦獨立自尊の人なれども、其の初時に在ては父母之が教養の責に任せざるべからず、子女たるものは、父母の訓誨に従ひて、孜々勉強、成長の後獨立自尊の男女として、世に立つの素養をなすべきものなり。

十二、獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自ら學問を勉め、智識を開發し、徳性を修養するの心掛なかるべからず。

十三、一家より數家、次第に相集りて社會の組織を成す、健全なる社會の基は、一人一家の獨立自尊に在りと知るべし。

十四、社會共存の道は、人々自ら權利を護り、幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を尊重して、苟も之を犯すことなく、以て自他の獨立自尊を傷けざるに在り。

十五、怨を構へ仇を報ずるは、野蠻の陋習にして卑劣の行爲なり、耻辱を雪ぎ、名譽を全うするには、須らく公明の手段を擇べし。

十六、人は自ら従事する所の事務に忠實ならざるべからず、其の大
小輕重に論なく、苟も責任を怠るものは、獨立自尊の人にあらざ
るなり。

十七、人に交るには、信を以てすべし、己れ人を信じて人も亦己れ
を信ず、人々相信じて始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし

十八、禮儀作法は、敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば、苟
めにも之を忽にすべからず、只其の過不及なさを要するのみ。

十九、己れを愛するの情を擴めて他人に及ぼし、其の疾苦を輕減
し、其の福利を増進するに勉むるは、博愛の行爲にして人間の美
徳なり。

二十、博愛の情は同類の人間に對するに止まるべからず、禽獸を虐
待し、又は無益の殺生を爲すが如き、人の戒むべき所なり。

二十一、文藝の嗜は、人の品性を高くし、精神を娛ましめ、之を
大にすれば社會の平和を助け、人生の幸福を増すものなれば、亦
是れ人間要務の一なりと知るべし。

二十二、國あれば必ず政府あり、政府は政令を行ひ、軍備を設け、
一國の男女を保護して其の身体、生命、財産、名譽、自由を侵害
せしめざるを任務と爲す、是を以て、國民は軍事に服し、國費を
負擔するの義務あり。

二十三、軍事に服し、國費を負擔すれば、國の立法に參與し、國務

の用途を監督するは、國民の權利にして又其の義務なり。

二十四、日本國民は男女を問はず、國の獨立自尊を維持するが爲に生命、財産を賭して、敵國と戦ふの義務あるを忘るべからず。

二十五、國法を遵奉するは、國民たるもの、義務なり、單に之を遵奉するに止まらず、進んで其の執行を補助し、社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす。

二十六、地球上、立國の數少からずして、各その宗教、言語、習俗を殊にするに雖も、其の國人は等しく是れ全類の人間なれば、之と交るには、苟も輕重厚薄の別あるべからず、自ら尊大にして他國人を蔑視するは、獨立自尊の旨に反するものなり。

二十七、吾々今代の人民は、先代前人より繼承したる社會の文明福利を増進して、之を子孫後世に傳るの義務を盡さるべからず。

二十八、人の世に生るゝ、智愚強弱の差なきを得ず、智強の數を増し、愚弱の數を減ずるは教育の力に在り、教育は即ち人に獨立自尊の道を教へて、之を躬行實踐するの工風を啓くものなり。

二十九、吾黨の男女は、自ら此の要領を服膺するのみならず、廣く之を社會一般に及ぼし、天下萬衆と共に、相率ゐて最大幸福の域に進むを期するものなり。

(四十八)

西村茂樹と佐久間象山

日本弘道會を組織して専ら我が國民の道德を高めんと期した西村茂

樹翁は明治以前にも大に國事に盡したものであつた、即ち嘉永四年二十四歳にして佐久間象山の門に入りて洋砲及び西洋の兵法を學び従前、佐倉藩學及び安井息軒に就いて修めし儒學の外に、武技を修して、國步艱難の時局を救はんと期したのであつた、之より先き十九歳の時既に國家防禦の武技は砲術なることを知り、藩の砲術教場に於て打砲の術を學び、銃隊の練法、大砲の製造、及び發射の術を研究し、進んで東西の兵法を究めんと欲し、乃ち大塚同庵に就きて其の術を學び、在學四年にして其の免狀を得たのであつた、其の時茂樹翁は左の詩を作て、其の所感を陳べた。

累世家名在貳貳、
特以二火技一換二槍矛、

取長舎短 因二時世一、
祖考有レ靈應二點頭一、
人非二仙鬼一貴量才、
多藝從來難遲奇、
衆技棄來存二一技一、
此心應有ニ智人・知一、
蓋し翁の祖考は佐分利流の槍術を以て佐倉藩の教授であつたが、翁は時勢の變遷、最早之を以て雄を争ふこと能はざるを知り、砲術を究めたのである。

所が當時同庵の傳ふる所は未だ洋砲の術を盡さなかつた、會々象山が居を京橋木挽町に卜し、帷を下して砲術を教授するに逢ふたから翁は直ちに其の門に入り、砲術及び兵法を學んだのであつた、時に同門に在るもの凡そ百五十人許であつたといふ。

日本偉人逸話

百四十八

一日師象山雜感八首を作て門人に示すや、翁之が韻に和して八首の詩を作り、大に其の志を述べたのであつた、其の中一二首を記せば。

太平通習在姑息、

勇斷誰能斬亂繩、

堪笑狂生論國計、

手揮秃筆一對殘燈、

百歲驕奢傷士氣、

神州風節幾人存、

寄言廊廟銓衡輩、

莫恃地形爲鐵門、

實にこれ幕末士氣の衰へたるを慷慨したもので、翁の國家を憂へし精神を看るべきであります。

(四十五)

西村茂樹の弘道會要領

明治維新後、我國は西洋の文物を輸入して専ら國內の開化を圖るに

急であつた爲に、自然國民の

徳育に就て忽せにした點があ

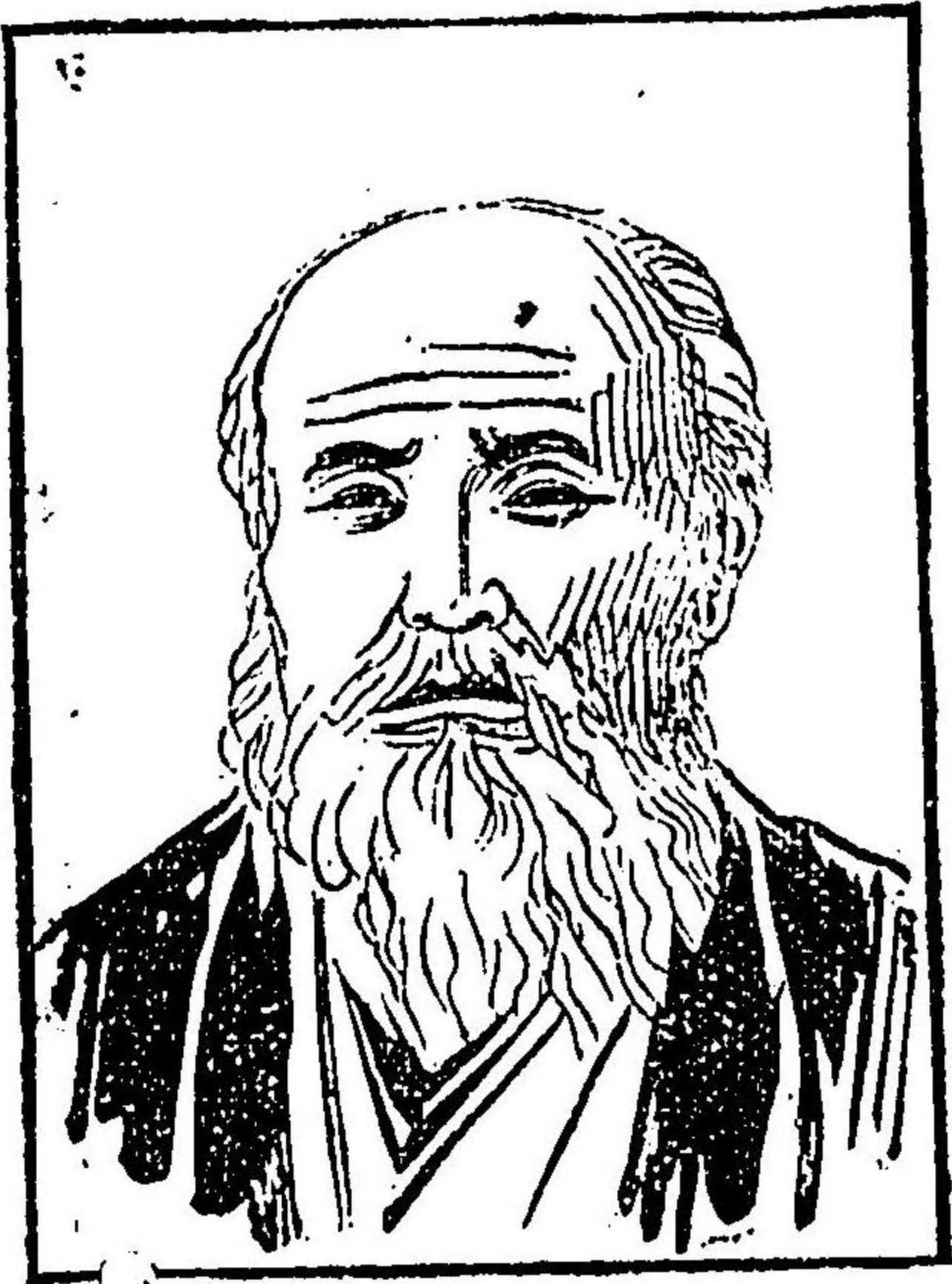
つた、それを翁は大に憂へ、

明治六年、中村敬宇、西周等

の人々と共に明六社を起し、

道義の研究に勉めたが、後ち

之を日本講道會と稱し、東西



の著書等を刊行した、然し之にては國民を徳化することが出来ぬといふので、遂に日本弘道會を組織し、翁之が會長となつて、大に道

義の鼓吹に勉むるに至つたのであります亦偉とすべきことである。

日本弘道會主意

日本弘道會は明治九年故西村茂樹先生の創立にして、其の主旨とする所は、邦人の道徳を高くし、國家の基礎を鞏固にせんとするにあり而して儒教哲學及び宗教の一方に偏倚せず、諸教の長所を採り、明治二十三年十月三十日の聖詔を遵奉し、本會所定の要領を實行するを目的とす。

といふのが現今、日本弘道會の世に公にせる所で之を以て觀れば翁の見地が福澤翁とは少しく趣を異にして居ることを了解せられます、而して翁の定めたる實行箇條の要領は左の如くであります。

要領 甲 號

- (一) 忠孝を重んずべし。 神明を敬ふべし。
- (二) 皇室を尊ぶべし。 本國を大切にすべし。
- (三) 國法を守るべし。 國益を圖るべし。
- (四) 學問を勉むべし。 身體を強健にすべし。
- (五) 家業を勵むべし。 節儉を守るべし。
- (六) 家内和睦すべし。 同郷相助くべし。
- (七) 信義を守るべし。 慈善を行ふべし。
- (八) 人の害を爲すべからず。 非道の財を貪るべからず。
- (九) 酒色に溺るべからず。 惡き風俗に染るべからず。

日本偉人逸話 百五十二
(十) 宗教を信ずるは自由なりと雖も、本國の害となるべき宗教は信すべからず。

要領乙號

- (一) 世界の形勢を察すること。
- (二) 國家の將來を慮ること。
- (三) 政治の良否を觀ること。
- (四) 國家の經濟を知ることに。
- (五) 教育の適否を考ふること。
- (六) 無識の者を教化すること。
- (七) 道德の團結を固くすること。

- (八) 正論を張り邪説を破ること。
- (九) 國民の風俗を改善すること。
- (十) 社會の制裁を作ること。

其三 西洋偉人小傳

(五十) ベンジャミン、フランクリンの幼時

米國の平民的偉人ベンジャミン、フランクリンは西曆千七百七年一月に合衆國ボストン市に生れた人でありました、父はもと英國人でありましたが、宗教上の信仰を異にする所より英國を去り、米國に移住して、信仰の自由を求め、フランクリンを擧げる二十五年前に

既に米國に生活して居りました、所が父は移住の後、石鹼并に蠟燭の製造に従事して居りましたが、年々子女が殖へて十七人の男女を有するに至りましたから家計は年々不如意に陥るばかり、妻君大に儉約を勤めました、けれども瘦世帯の到底満足なる生活は營まれなかつたのであります。

ペンジャミンは此の困窮せる父の第十五子であつて、八歳にして小學に入りましたが、學資が續かぬといふ所より、半途にて退學し、直に速成の學校に入りて讀書習字の一端を終へ、二年の後家に歸りて父の業を助けました、かくて父より命せられ、十歳にして、父の知れる鍛冶工場に奉公しましたが、兎角面白からぬ所より、十二歳

西洋偉人小傳



に至り、其の兄のゼームスがポストンにあつて印刷業に従事せるを頼り、一時之に身を寄することとなりました。

所がペンジャミンは幼より讀書を好みましたから、日夜活版の整頓やら、文撰等の事業に従ひながらも、一刻も讀書を廢することなく、各所の書店にて諸種の新刊書を買求め、之を繕いて夜深しするところがあるに至りました、そこで兄ゼーム

スは弟ペンジャミンの勤學に感じ、然も其の苦勞が身体を害せんこ

とを恐れ、夜中は成るべく休養するやうにと諫めましたけれども、ペンジャミンは其の厚意を謝しつゝ、毫も勉學を廢せず、依然として讀書癖を振起して萬卷の書を讀破らねば止まぬとの決心を定めました、其の時僥倖にも一の富翁があつて、彼の志を嘉みして其の所藏の書物を貸與ふることを約しましたから、ペンジャミンは之に力を得て益々書籍を繕いて知見を廣め、文を作り詩を賦して活版所内での一異才として目せられたのであります。

かくて一日菜食獎勵の書を読み大に之に感じ、其の日より斷然肉食を止め、麩と菓子と水にて食事を濟し、其の費用を半減し其の費を以て好める書籍を買ひ求め、只管知識を増進することを勉め

ました、而して三年の後兄ゼームスが新聞紙を發行するや、ペンジャミンは、一の植字工として立働いて居りましたが、何時しか匿名にて論説を投書し、編輯長をして其の名文に感せしめ、穿儀の結果ペンジャミンの投書と知れて大に社員一同を吃驚せしめたとのことであります。

(五十一) 中年時代の困苦

此の如くペンジャミンは暫時兄の許にあつて其の業を助けて居りましたが、一日争論の結果兄の打擲する所となり、奮然として其處を去り、紐育へと赴かんとしたのであります、されど其の懷中には僅かの旅費よりなく、市内の活版所も兄よりの通知によりて總てペン

ジャミンを雇ふことを拒みましたから、彼は詮方盡きて其の愛惜せる書籍を賣り拂ひ、船に投じて紐育へと走つたのであります。時に年十七歳でありました。

かくて紐育に上陸してよりベンジャミンは諸處の印刷所を訪ふて雇入れんことを以てしました、けれども何れも多くは満員の故を以て断りました、そこで僅かにフキラデルフキヤにある某を尋ねんと、一人の道伴れと共に船に乗つて之に赴きました。固より囊中僅に一弗餘を剩すに過ぎぬことゆへ、多くは徒歩にて行き、渡場には船頭と共に櫂を漕ぎて其の勞を助け、かくて漸くにして費府に着し、空腹なる爲に途上に三錢のパンを求め喫ひ、コーヒーの代

りに河水を飲みて渴を癒し、連日の疲勞の爲に思はず、トある教會堂に入りて説教を聴きつゝ遂に眠りに落ちたのであります。それより全處を出で或る安宿を求めて一泊し、翌朝目差す印刷所を尋ね其處をも断られて、僅かに某の紹介にてケーマルといへる印刷所に到り、百方懇願して漸やく雇ひ入れらるゝに至つたのであります。

(五十二) 渡英と成功の緒

所がベンジャミンの勤勉は固より他の職工に超ゆること數等であつたから、十八歳の時には早くも獨立して營業を爲さんと志すに至り、自ら英國に赴き、諸機械を購ひ歸らんと企てました、然るに渡

航海其の計畫見事に外れて失敗に歸し、ペンシヤミンは又もや身を職工に落すに至りましたが、かくて在英二年間大に質素儉約の生活を續け、麥酒の代りに水を飲み、麪とチースの代りに粥を噉りて、大に其の業務に勉め、二十歳の時費府に歸りて印刷業者として漸次成功し、且つ時間を節しては讀書に勉め、所感ある時は之を筆録して世に公にし、後には妻を迎へて漸く財産をも貯ふるに及び、千七百四十六年には始めて電氣應用の術を發明し、雷鳴の日に紙鳶を揚げて之を試験したのでありました、それよりフランクリンとしての社會の尊敬厚く、千七百五十七年には殖民地の大使として英國に駐在し、千七百五十七年には合衆國獨立の爲に歎願使として英國

に遣はされ、尋て米國獨立成るや、一方の長官として共和政府の創業を佐け、赫々たる名聲を馳せたる後千七百九十年に至り、八十四歳の高齡を以て世を辭したのであります。

(五十三) 規律なる經濟的生涯

ペンシヤミン、フランクリンは其の一生を通じて經濟に意を用ひ、先づ己が獨立生活の基を固め、而して餘暇を以て智を磨き徳を進むることを心掛け、それが爲に自ら規則を設け、毎朝五時に起きて、沐浴し、祈禱し、朝食をしてより讀書を爲し、以上に三時間を費し午前八時より十二時迄を職業の爲に働き、正午より午後二時迄は讀書若くは臨時の用務を辨することとし、かくて午餐を喫ひ、それよ

り午後五時迄再び職業に従事し、夜十時までには讀書や交際や夕食に充て、かくて後睡眠に就くを日課としました、これ實に規律ある生活といつてよいのでありまして、此の規律と經濟とが彼をして獨立自營以て一代の偉人たらしめた所以でありました。

(五十四) 座右銘

前上の如き規律ある生涯を送つたフランクリンには實に左の如き座右銘があつて、之によつて其の心身を律し、以て智徳の上進を圖つたのであります。

一、節制 ものうくなるまで食ふこと勿れ。

醉ふまで飲むことなかれ。

二、沈黙 自他の爲になり得べきことの外は言ふことなかれ。

用もなき雑談を避けよ。

三、秩序 物は總てよく之を整頓せよ。

仕事はそれ／＼時を違へず、之を爲せ。

四、決心 己が當に爲すべきことは爲さんと決心せよ。

一旦決心したる事は必ず成し遂げよ。

五、儉約 自他の爲になることの外に金錢を費すこと勿れ、即ち無

益に費すこと勿れ。

六、勤勉 みだりに時を費すこと勿れ。

何か有益なることに従事せよ。

一切無益の動作を休めよ。

七、誠實 詐術を用ふること勿れ。

潔白に正直に考へよ、話すときにも亦然かせよ。

八、正義 損害を加ふることにより、若くは己が本務を怠ることに

よりて、他人に禍を及ぼすことなかれ。

九、中和 極端を避けよ。

損害を受けたるが爲に怒ること勿れ。

假令怒るべき價値はありとも。

十、清潔 身体、衣服、住居を決して不潔にすることなかれ。

十一、沈着 瑣々たる事や、普通若くは必至の事變に心を動かすこ

となかれ。

十二、貞操 ……………。

十三、謙遜 イエス（耶穌）とソクラテースとを學べよ。

（五十五）サムエル、ジョンソンの幼時

今より殆ど二百年前、英國リチフィールドといへる所に貧乏なる書籍商があつた、毎日隣村の向ふなるアトクセターの市場へ出て書物の露店を出し、それにて夫婦訛しく暮して居つたが、二人の中に最愛の一子を挙げました、所が此の子の三歳の時瘰癧を患ひたから、母は當時の迷信により、此の子を王様に觸れよば癒ると思ひ込み、其の大切に藏ひ置きたる二磅の金を衣服の裾に縫ひ込み、子息を脊負

つて遙々と首府倫敦へ上り、首尾能く雑踏を排して女王アンの玉体に其の子を觸れしめました、然るに其の効もなくて其の子は一眼の明を失ひ、一眼は僅かに一尺半の向ふを見得るばかりとなり、且つ其の面貌も極めて醜い兒となつて仕舞ひました、不幸此の上なきことであるが、此の憐れむべき一子が即ち後來に大文學者として名を馳せたサムエル、ジョンソンであつて、或はかゝる不幸が遂に此の一子をして専門的に其の才能を善所に發揮せしむる原因となつたものとも言ひ得るのであります。

さればジョンソンは貧乏ながらも學齡に達して寡婦オリヴァーといへる人の開ける小學校に送られ、其の殆ど不具なる爲に他の兒童と

も遊戯せず、交際も少く、自然机に憑りて書物に親む人となり、此の小學を優等にて卒へ、更に高等小學校に通ひて羅典語を學び、峻烈なる教師の鞭に苦められ、十六歳にして全校を退き、爾來二年間家庭にあつて、父の業務を助けつゝ讀書に耽つて居つたのであります。

(五十六) 少年時代の磊落粗暴

或日の事、父は例の如く隣村の向ひなるアトクセターの市場に出でんとしたが、氣分少しく不快なる爲に、寢床より其の子のジョンソンを呼び「最早汝も十七歳、父に代ていつもの市場へ出て露店を張つて呉れよ」と頼みました、所がジョンソンは其の面貌の醜さと、

露店などを賤む心ある所より、父の言に従はず「御父様私は御免を蒙りたふ御座います」と、答へながら書物を讀み、中々承知しさうにもない、そこで父は我を折り、病軀を提げて市場へ出掛けたのであります、此の如くジョンソンは負けぬ氣の腕白小僧でありました。

さればジョンソンは商賣よりも自然學問の方に心堅く、十九歳にしてオックスフォールドのペンブロック大學に入りましたが、固より學資のあるといふのでない、そこで校僕となりて雜役を助けつゝ傍ら苦學したのであります、其の時彼の學友はジョンソンの衣破れ、垢付き、靴裂けて指頭を出して居るのを見て、嘲笑ふたけれども彼は

毫も之に屈せず、愈々其の志を剛まして廣言し、今に見よ我れ富貴とならん、何時までかくて蔽衣破帽の人たらんやとて富家子弟等に對抗したのであります。

されば或日の事、或る金満家の青年がジョンソンの靴の全く破れて用を爲さぬのを憐み、潜かに新しいのを調へ、之を彼の上り口に据へておいた所、負けぬ氣の彼は、之を見ると忽ち疝癪を起し、其の靴を窓より抛り出して曰く一人の恵みに預るなどは、男子の屑しとせざる所である」と、かくて獨立獨行、平氣にて學業を修めたが三年の末父の死去と共に僅かの仕送りさへ絶え、止むなく大學を退くに至つたのであります。

(五十七)

中年時代の苦闘

大學を退いてより、ジョンソンは職を求めても中々に得られない、終に小學校の助教にでもと思つて志願したけれども、面貌の醜き爲に、迎も生徒の薰陶は出来ぬと拒まれた、然し強めて請ふて試みに助教になつて見た所、案の條失敗しました、そこでポルターといふ己れより倍も年上なる寡婦と婚し、始めて貧しき家庭を作り、其の持參金を資本として私塾を開いて見た、然し之も失敗に終つたから遂に意を決して倫敦市の中央へ乗り出し、一日五片の食ふや食はずの生活を甘んじ、糊口の爲にとて、詩を作りて世に公にし、始めて十磅の原稿料を得た、時しも詩人ポーアは既に大家であつたから

ジョンソンの境遇に全情し、彼を愛蘭のダブリン大學に紹介し、學士號の贈與を頼んでやつた、之は小學校長としての資格を得られるからであります、然るに全大學よりは体よく之を謝絶するの返信が來たから、ジョンソンは四十歳にして「人の願ひの果敢なしや」といへる詩を出して二十五磅を占めました、之は自己の境遇を歌ふたものであつた。

かくて後ジョンソンは文士として世に立ち、アイリンといふ悲劇を書き下して之を舞臺に上せ、爲に二百磅を儲けたが、其の芝居は殆ど失敗に終つた、かくの如くすること十三年にして漸く世人の知る所となり、妻も之を喜んだが不幸にも夫に先だつて歿しました、そ

ここでジョンソンは大に之を悲み、爾來世帯を疊んで小屋に閉籠り、唯だ、其の天職と信ずる所を屹々として盡す所があつたのであります。

(五十八) 最後の勝利

此の忍耐が終にジョンソンをして最後の勝利を得せしむる端となり千七百五十五年には生涯の最大著述なる英語字典を完成し、千六百磅を得た、されど其の編纂には六人の助手を使ひ、七年の長日月を費したから、差引剩す所は少かつたのである、されど、之によつて其の名高まり、オックスホルドとダブリン兩大學よりは其の出身の緣故より學士號を贈り來り、皇帝ジョージ三世さへ陪食の榮を賜ふ

に至つた。所が不幸にも千七百五十九年、其の母病の爲に長逝しましたからジョンソンは其の葬式を營む爲にとて一週間引籠り急に「ラセラス」といふ一小説を走り書きに起稿し、漸く其の費を辨じたのであつたかく依然として貧困であつたが、千七百六十二年國王の手許より多年の功勞に酬ふとして年三百磅の恩金が下るに至り、漸く老後を安全に過し得るに至つた、されど彼は貧困なりし昔を忘れず、年八十磅にて暮し、其餘は之を多く慈善事様に投じ、己が妻の舊友たりし老婦や老人を養ひ、又下女をも親切に世話して遣り、實に一視同仁に世人を救濟したのであつた。

西洋偉人小傳

百七十四

かくて最後の名著述なる詩人傳を著してより五年目なる千七百八十四年に七十五歳を以て世を辭したのでありました、そこで其の遺骸はウエストミンスター寺院に埋められ、其の記念碑は聖ポーロ寺院に建てられ、永く英國文豪の一人として世に慕はるゝに至つたのである、之を思へば人世の逆境不幸の如きは必ずしも之を悲觀すべきものではない。

(五十九) 懺悔の逸話

ドクトル、ジョンソンの名が英國に鳴り渡つた時、彼は一日飄然として昔馴染のアトクセターの市場に漂ひ、衆人雑踏の中を推分け分け古教會の角に留まり一聲「此處だな」といつた儘何やら感じ入

つた如く、顔をしかめ、身を震はし、



時に天を仰いで祈禱を爲し折しも脳天を煎り付ける如き三伏の炎熱をも恐れず、平氣で、長時間立ち盡して居つた、そこで往き交ふ人々不審に思ひ何人ぞと怪んで居つた所、時しも倫敦新下りの馬車の馭者が顔を知つて居つて、アレ

こそ今、世に時めくドクトル、ジョンソンよといつたので、人々には何事ぞと怪みて噂は其れからそれと傳へられたが、實にジョンソン

この此の舉動こそ狂せるにあらず迷へるにあらず、昔し己が父の貧苦と闘ひつゝ書物の露店を出せる處に來り、懷舊の涙にむせぶと共に、其の嘗て父の命に従はざりし不孝の罪を懺悔しつゝ謝罪したものであつた、そこで世人も其の殊勝なる志に感じ、五十年後の懺悔として之を傳ふるに至つたのであります。

(六十) オリバー、ゴールドスミスの幼時

西曆十八世紀の大詩人と謳はれたるオリバー、ゴールドスミスは英國愛蘭士のバラスといふ所の貧しき牧師の子でありました、七人兄弟で其の家が貧しいのであるから、オリバーも完全なる教育を受けることが出來ず、唯だ天性讀書を愛したから小學に通へる頃より、

何時とはなしに詩などを作るに至つた、そこで母は其の天才を認めせめて此の子だけは大學の教育をも受けさせんと欲したが、中々に日々の生活に逐はれて之を實行することが出來なかつた、所が小學の成績も優等であつたから、父も一時オリバーの爲に學資を準備して居つたが、不幸にもオリバーの姉が或る富豪の子と結婚することとなつたから、其の嫁入費として従來積み上げてあつた四百磅を悉く之に投じてしまつた、さればオリバーも其の身の不運を歎くと共に深く決心し、獨立自營を誓ひ首府ダブリンに在るツリニチー大學の校僕となり、赤帽と袖なしの黒服とを着けて小使として働き、傍ら勉學するに至つたのであります。

(六十一) 青年時代の漂泊

此の如くオリバーが決心して苦學せる折しも、不幸は又々重なり來つて、其の父なる牧師は一朝病氣の爲に世を辭つて仕舞つた、之が爲に多少オリバーへも補助をして居つた金さへ絶へることとなり、オリバーは實に窮迫を告げるに至つた、そこでオリバーは再び決心し、我が家へ歸つた所で貧しき生活の如何ともすることは出来ぬ、此處は世路に立ちて自活するに如かずとて、十九歳の身を以て俗語を作り、ダフリンの市内を流して歩く琴彈きに之を賣り、一節五志にて其の需に應じ僅かに口を糊すの料としました、かゝる間に於ても多情多感なるオリバーは乞食や貧書生には大に全情し、時には多

くもあらぬ懐を拂ひて彼等に恵み、或時の如きは五人の子供を作れたる貧しき婦人が冬の寒空に震へて居るのを見、直ちに己が身に纏へる氈子を悉く彼に與へて仕舞つた、それが爲に自分は寒くて臥床より出ることが出来なくなつたといふことであります。かく困苦しながらも、オリバーは校僕を勤め、傍ら勉學して居りましたが、之を聞いたる或る大學教授が氣の毒に思ひ、爾後毎月、幾許かの學資を補助せんと告げました、そこでオリバーは喜び、一夕友人を己が居室に會して小宴を開き、聊か其の身の幸福を祝して居りました處、或る助教は之を聞き、他人より救助を得て修學しながら、酒宴を開くなどとは以ての外であるとして、行きなり鐵拳をオ